

一般県道旧奈和西坪線地方特定道路整備事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書

鳥取県西伯郡名和町

坪田遺跡

2002

財団法人 鳥取県教育文化財団

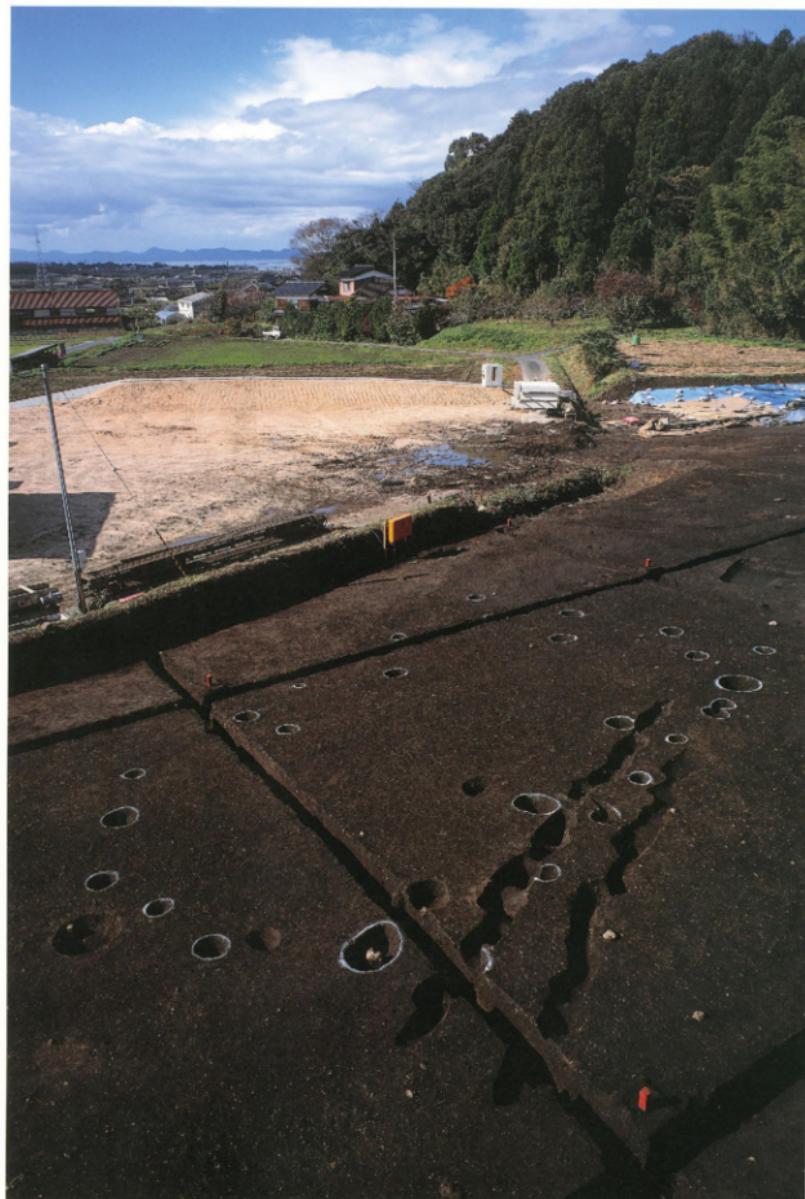
一般県道旧奈和西坪線地方特定道路整備事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書

鳥取県西伯郡名和町

坪田遺跡

2002

財団法人 鳥取県教育文化財団



S B 1

序

西伯郡名和町は、鳥取県西部に位置する人口約7600人、総面積45.02km²の町です。

北は日本海に面し、南は間近に大山を仰ぎ見る自然環境に恵まれた町です。山陰地域を東西に結ぶ幹線沿いに位置することから古くより人々の往来があり、名和神社をはじめ歴史的遺産が数多く存在します。近年の諸開発に伴う発掘調査の増加により多数の遺跡が確認されており、名和町の過去の姿が明らかになりつつあります。

鳥取県から調査委託を受けた鳥取県教育文化財団では、一般県道旧奈和西坪線の敷設に伴い失われる遺跡の記録保存を図るため、平成13年10月から同12月にかけて「坪田遺跡」の発掘調査を実施いたしました。その結果、縄文時代から鎌倉時代に至る遺構の存在が明らかになり、多数の遺物が出土しました。これらは名和町周辺の歴史を叙述するうえで重要な資料になるものと考えております。

また、本書が文化財に対する理解を深める一助になり、広く活用されることを願っております。

最後になりましたが、鳥取県土木部道路課、鳥取県米子土木事務所、並びに地元の皆様をはじめ調査に御協力いただいた関係諸機関に心から感謝するとともに厚くお礼申し上げます。

平成14年3月

財団法人 鳥取県教育文化財団

理事長 有田 博充

例　　言

1. 本書は、鳥取県教育文化財団が2001（平成13）年度に実施した「一般県道旧奈和西坪線地方特定道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査」の調査報告書である。
2. 調査した遺跡の所在地は次の通りである。

西伯郡名和町寺字ノ前58、59-2、60-2、60-3、60-4、61-6、61-7、字小門2322-2、2323
3. 本報告書における方位、座標値は国土座標第V系の座標値である。レベルは海拔標高を示す。
4. 本報告書に掲載の地形図は、国土地理院発行の1/25000地形図「御来屋」「淀江」「船上山」を使用している。
5. 出土した棒状石製品の分析を、岡山理科大学自然科学研究所 白石純氏に依頼し、その結果を掲載した。
6. 本報告書の作成は、鳥取県教育文化財団調査員 岡野雅則、君嶋俊行の協議に基づいてを行い、編集は岡野が行った。文責は各項目の文末に記載した。
7. 掲載した図面は、調査員が作成したものを室内整理作業員が净書を行った。遺物実測図の作成、净書については、基本的に室内整理作業員が行い、各段階において調査員が検討を行った。
8. 現場写真の撮影は調査員が行い、遺物写真の撮影は、独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所の牛島茂氏、杉本和樹氏（西大寺フォト）に依頼した。
9. 出土遺物ならびに図面・写真類はすべて鳥取県埋蔵文化財センターに保管している。
10. 現地調査及び報告書の作成にあたっては、辻 信広（名和町教育委員会）、田原淳史、西尾克己（以上島根県埋蔵文化財調査センター）、山田康弘（島根大学）の各氏をはじめ多くの方々から助言、支援をいただきたい。末筆ながら感謝いたします。

凡　　例

1. 遺構の略号は次の通りである。

S B : 据立柱建物跡 S K : 土坑 S D : 構造遺構、自然流路 P : ピット
2. 遺物実測図のうち、須恵器は断面を黒塗りにし、青磁、土師器、土師質土器は白抜きで表現した。
3. 土師器もしくは土師質土器の名称については議論のあるところであるが、本書では伝統的な土師器の製作技法とは異なるとの認識の上で、回転台上で成形したと思われるものについて「土師質土器」の名称を使用している。
4. 本報告書における土器、陶磁器類の分類、編年観については次のものを参考に遺構並びに遺物の時期比定を行っている。11～13世紀前後の土師質土器、瓦質土器については、基本的には八峰 舞氏の年代観に依拠している。ただし、当該期の編年は研究者による認識のずれが存在しており、なお流動的であることを付け加えておく。

足立克己・丹羽野 裕編 1984 「第6章 まとめ (3) 遺物」『高広遺跡発掘調査報告書』鳥根県教育委員会
八峰 舞 1998 「山陰における中世土器の変遷について」『中近世土器の基礎研究』13号 日本中世土器研究会
鈴柄俊夫 1997 「第1部中世食器の地域性 8.山陰」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集
日本中世土器研究会編 1995 「概説 中世の土器・陶磁器」真陽社
巽 淳一郎 1979 「2.土器類」『伯耆国庁跡発掘調査概報(5・6次)』倉吉市教育委員会

目 次

序
例言
凡例
目次

第1章 発掘調査の経緯	(岡野) 1
第1節 調査に至る経緯	
第2節 調査体制	2
第2章 遺跡周辺の歴史的環境	(岡野・君嶋) 3
第3章 発掘調査の成果	5
第1節 調査の経過と方法	(岡野) 5
第2節 調査区内の堆積	(岡野) 5
第3節 第一造構面(中世)の調査	(岡野・君嶋) 10
第4節 第二造構面(奈良時代～平安時代ほか)の調査	(岡野・君嶋) 12
第5節 包含層、調査区内出土遺物	(君嶋) 27
出土遺物観察表	32
第4章 特論	
坪田遺跡出土棒状石製品の石材について	白石 純 36
第5章 まとめ	(岡野・君嶋) 38

P L A T E

挿図目次

第1図 調査位置図 1	1
第2図 坪田遺跡位置図	3
第3図 周辺遺跡分布図	4
第4図 調査区内基本層序模式図	5
第5図 第一造構面遺構分布図	6
第6図 第二造構面遺構分布図	7
第7図 調査区南北方向土層断面図	8
第8図 調査区東西方向土層断面図	9
第9図 S D 2	10
第10図 S K 4	10
第11図 S B 1	11
第12図 S B 1・S D 2出土遺物	11
第13図 S B 2	12
第14図 S B 3	13
第15図 第二造構面遺構平面図 1	14
第16図 第二造構面遺構平面図 2	15
第17図 S K 1	16
第18図 S K 2	16
第19図 S K 5	16
第20図 S K 3	17
第21図 S K 6	17
第22図 S K 7	17

第23図	S K 8	17
第24図	S K 9、 S K 10	18
第25図	S K 9、 S K 10出土遺物	18
第26図	S K 11	18
第27図	S K 12	19
第28図	S K 13	19
第29図	S K 15	19
第30図	S K 14	19
第31図	S K 16	20
第32図	S K 17	20
第33図	S K 18	20
第34図	S K 19	20
第35図	S K 20	21
第36図	S K 21	21
第37図	S K 23	21
第38図	S K 22	21
第39図	S K 24	22
第40図	S K 25	22
第41図	S K 26	22
第42図	S K 28	23
第43図	S K 27	23
第44図	S D 1 土層断面図	24
第45図	S D 1	25
第46図	S D 1 出土遺物	25
第47図	S D 3	26
第48図	S D 3 断面図	26
第49図	S D 4 出土遺物	27
第50図	II層遺物出土状況および出土遺物	27
第51図	S D 4	27
第52図	I層出土遺物分布図	28
第53図	I層出土遺物 1	29
第54図	I層出土遺物 2	30
第55図	II層出土遺物	30
第56図	調査区内出土遺物 1	30
第57図	調査区内出土遺物 2	31
第58図	C5グリッド周辺出土土器	38

図版目次

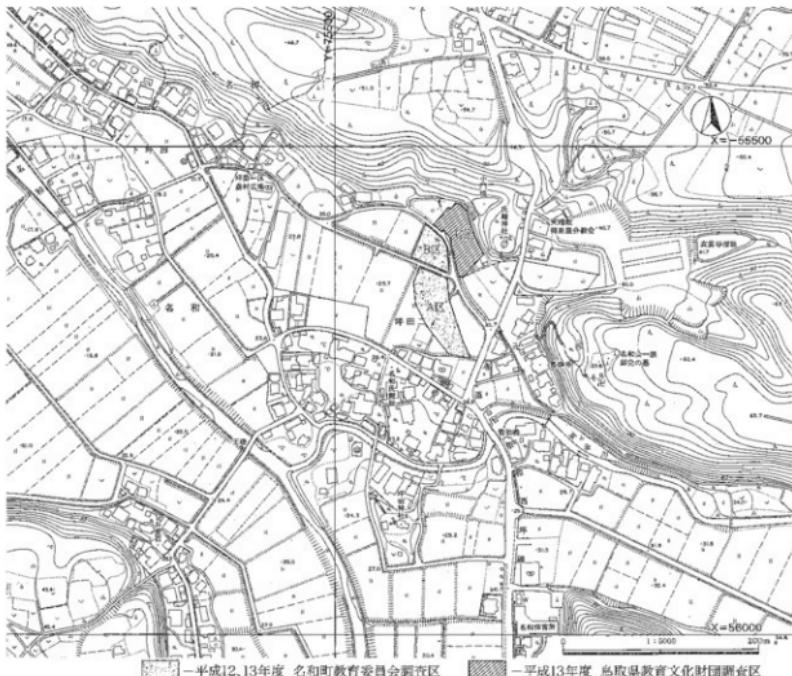
P L. 1	遺跡周辺の地形	P L. 11	1. S B 2
P L. 2	遺跡周辺の地形		2. 第二遺構面完掘状況
P L. 3	1. 第二遺構面完掘状況	P L. 12	1. S K17 4. S K20
	2. I層(黒褐色土) 遺物出土状況		2. S K18 5. S K21
	3. 1層(黒褐色土) 遺物出土状況		3. S K19 6. S K22
P L. 4	1. S D 2 (南西から)	P L. 13	1. S B 3
	2. ベルト土層断面(F5-E5ライン)		2. S D 4
	3. ベルト土層断面(G5-F5ライン)	P L. 14	1. S K23 4. S K26
	4. S D 2 土層断面		2. S K24 5. S K27
	5. II層(黒色土) 土器77出土状況		3. S K25 6. S K28
P L. 5	S B 1	P L. 15	1. S D 1
P L. 6	第一遺構面完掘状況		2. S D 1 土層断面
P L. 7	1. S K 1 4. S K 4	P L. 16	1. II層(黒色土) 出土遺物 1
	2. S K 2 5. S K 5		2. II層(黒色土) 出土遺物 2
	3. S K 3 6. S K 6		3. I層(71)、S K 1 (116-117) 出土遺物
P L. 8	1. S K 7 4. S K 9	P L. 17	包含層出土遺物 1
	2. S K 8 5. S K 9底面検出状況	P L. 18	包含層出土遺物 2
	3. S K 8土層断面 6. S K11	P L. 19	1. 遺構内出土遺物
P L. 9	第二遺構面完掘状況		2. 石器・石製品
P L. 10	1. S K 13 4. S K 15	P L. 20	包含層出土遺物 3
	2. S K 14 5. S K 15 土層断面		
	3. S K 16 6. S K 16 土層断面		

第1章 発掘調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

本発掘調査は、鳥取県が進める地方特定道路整備事業工事を原因とし、西伯郡名和町字寺ノ前、字小門の工事予定地内に存在する埋蔵文化財の記録保存を目的としたものである。当該地周辺の工事予定地内は、從来周知の遺跡として登録されていないが、近接する名和公館跡伝承地に関連する遺跡の存在が予察された。このため、名和町教育委員会は国及び県の補助金を得て、平成11年11月から同12月にかけて試掘調査を行った。その結果、古墳時代、中世の遺物が確認され、遺跡の存在が認められた。

関係諸機関と協議した鳥取県教育委員会事務局文化課は、遺跡の現状保存は困難と判断し、記録保存のための事前発掘調査を行うことになった。これを受けて鳥取県土木部道路課及び鳥取県米子土木事務所は、文化財保護法第57条3項に基づく発掘通知を文化庁長官に提出した。その上で発掘調査の指示を得た鳥取県土木部道路課は、調査を財団法人鳥取県教育文化財団に委託した。調査は、平成13年度に西部埋蔵文化財名和調査事務所坪田分室が担当することになり、財団法人鳥取県教育文化財団鳥取県埋蔵文化財センター所長から文化庁長官に文化財保護法第57条1項に基づく発掘届を提出した。
(岡野)



第1図 調査位置図

第2節 調査体制

調査主体 財團法人鳥取県教育文化財団

理事長 有田 博充（鳥取県教育委員会教育長）

常務理事 関 敏之（鳥取県教育委員会事務局次長）

事務局長 岡山 宏徳

財團法人鳥取県教育文化財団 烏取県埋蔵文化財センター

所長 中村 登（鳥取県埋蔵文化財センター所長）

次長兼調整係長 加藤 隆昭

文化財主事 高垣 陽子

庶務係主任事務職員 矢部 美恵

事務職員 小林 順子

調査担当 財團法人鳥取県教育文化財団 西部埋蔵文化財名和調査事務所坪田分室

所長 西村 成徳

調査員 岡野 雅則 君嶋 俊行

調査指導 鳥取県教育委員会事務局文化課 烏取県埋蔵文化財センター

第2章 遺跡周辺の歴史的環境

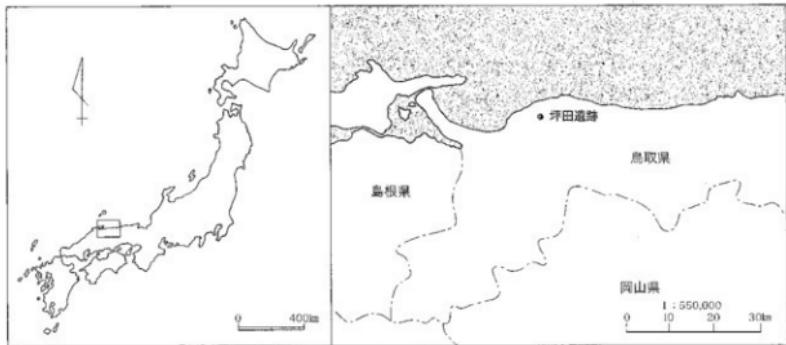
旧石器時代の遺構・遺物は、現在のところ町内からは発見されていない。縄文時代の遺跡は火山灰台地上に多く立地し、後期以降に阿弥陀川の扇状地上にも展開するようになる。東坪の字津横、門前の字上大山で草創期の有舌尖頭器が発見されているほか、上大山第1遺跡(20)、角塚遺跡(23)、茶畑山道遺跡(12)〔以上早期〕、古御堂遺跡(9)〔後期〕、大塚遺跡(6)〔晚期〕、高田第10遺跡(19)、文殊領屋敷遺跡(10)〔以上早・晚期〕などで土器が出土している。南川遺跡(30)では後期の土器とともに石囲炉を持つ平地式住居址が発見されており、縄文時代の住居址としては県内でも希少な例である。また、落とし穴と考えられる遺構が、東高田遺跡(16)、上大山第1遺跡など台地上の遺跡のほか、河岸段丘上に位置する坪田遺跡でも検出されている。弥生時代の遺跡としては、前期では環濠集落とみられる大塚岩田遺跡(7)、中期では茶畑山道遺跡、茶畑六反田遺跡(13)、押平弘法堂遺跡(11)が調査されている。後期の遺跡は町内各地で発見されており、遺跡数の増加がうかがえる。古墳時代の集落遺跡の様相は明らかでないが、町内では約130基の古墳が確認されており、そのほとんどは後期の群集墳である。坪田遺跡の近傍には坪田古墳群(32)や門前古墳群(25)が所在している。

(君鶴)

古代寺院の存在は、古墳時代から奈良時代への移行を代表する考古学的指標であるが、名和町域では海岸線から約4kmに位置する高田原遺跡(18)が寺院跡として認識されている。乱石積墓壇、溝状遺構が検出され、淀江町上淀磨寺と同館の単兵12葉蓮華文軒丸瓦が出土している。

律令国家の地方行政は、国、郡、里を単位とし、その拠点として国府、都衙が設置された。伯耆国国府は現在の倉吉市に置かれ、コの字形の建物配置を伴う政府跡が確認されている。伯耆国は6郡に分かれるが、現在の中山町から淀江町にかけての大山北麓域は宍戸郡に属する。坪田遺跡の北西約700mに位置する長者原遺跡(34)はその郡衙に想定されており、礎石抜取り跡などが確認され、付近から銅印「財」が採集されている。

中央政府への物資・情報伝達網として全国に官道が整備され、要所には駅が設置された。平安時代に編纂された『延喜式』の記載によれば、伯耆国には東から笏賀、松原、清水、和奈、相見の5駅が明記されている。「和奈」は「奈和」の誤記とみられ、名和町名和周辺に想定される。古代山陰道の具体的なルートは明らかではないが、長者原遺跡の北西側に位置する馬郡遺跡(35)では溝状遺構とともに8世紀代の土器が出土しており、その小字名から奈和駅の存在が推定されている。阿弥陀川河口近くの大塚屋敷遺跡(5)では、7世紀後半から8世紀の倉庫群とみられる掘立柱建物群15棟などが検出されている。集落の具体相を窺える遺跡はないが、海岸段丘上に立地する浜ノ坂遺跡(39)では8世紀代とみられる溝で囲まれた掘立柱建物跡、鍛冶遺構が確認された。真子川上流の上寺谷遺跡(21)では奈良平安期の炉底とみられる跡が検出されている。



第2図 坪田遺跡位罫図



1. 緑葉方墳 2. 塚田遺跡 3. 新田原遺跡 4. 上野遺跡・上野第2遺跡 5. 大塚塚敷遺跡 6. 大塚遺跡 7. 大塚岩田遺跡 8. 大塚塚根遺跡
 9. 古御堂遺跡 10. 文殊領屋敷遺跡 11. 押平弘法堂遺跡 12. 茶畠山道遺跡 13. 茶畠六反田遺跡 14. 茶畠古墳群 15. 茶畠第2遺跡 16. 東高田遺跡
 17. 高田古墳群 18. 高田原遺跡 19. 高田第10遺跡 20. 上大山第1遺跡 21. 上寺谷遺跡 22. 柄原遺跡 23. 角原遺跡 24. 門前第3遺跡 25. 門前古墳群 26. 門前遺跡 27. 門前礎石群 28. 富長城跡 29. 富長山村古墳群 30. 南川遺跡 31. 名和公館跡伝承地 32. 坪田古墳群 33. ハンボ塚古墳 34. 長者原遺跡 35. 馬郡遺跡 36. 京進谷遺跡 37. 鹿光寺礎石群 38. 豊成古墳群 39. 浜ノ坂遺跡 40. 長野城跡

第3図 周辺遺跡分布図

古代から中世にかけての集落遺跡は、近年検出例が増加しているものの、集落の動態を推察するまでには至っていない。9～10世紀前後の集落である大塚塚根遺跡(8)では、掘立柱建物跡が検出されており、茶畠六反田遺跡(13)でも当該期の遺物が出土している。13～14世紀前半の集落遺跡として茶畠六反田遺跡、押平弘法堂遺跡(11)があり、掘立柱建物群など小村的集落の具体相がある程度窺える。門前礎石群(27)は、青磁、白磁、染付などが出土しており、中世以降の寺院跡の可能性が指摘されている。このほか、海岸段丘上には富長城跡(28)、長野城跡(40)など小規模な城跡が点在している。

坪田遺跡の南西側100mには、名和公館跡伝承地(31)がある。元弘3(1333)年、隱岐島を脱出した後醍醐天皇とともに船上山で拠点とした名和氏の居館跡とされるが、トレント調査では建物跡などは検出されていない。中世末段階の遺跡は僅かである。浜ノ坂遺跡では周溝を伴う土壙墓が検出され、室町期の所産とみられる和鏡が出土している。

(岡野)

第3章 発掘調査の成果

第1節 調査の経過と方法

坪田遺跡は、平成11年度の名和町教育委員会による試掘調査により初めて確認された遺跡である。平成12.13年度に町教育委員会が今回の調査地に隣接する3600m²（A・B区）を調査しており、9～11世紀とみられる掘立柱建物跡のほか落とし穴状土坑などが検出された⁽¹⁾。おもに古墳時代から中世、近世に該当する遺物が出土していることから、本調査地においても同様の時間幅をもつ遺構、遺物の存在が予察された。本報告の調査地は町教育委員会が設定したC区にあたる（第1図参照）。

調査は平成13年10月1日に開始した。国土座標第V系にしたがい、10m四方を1区画として方眼（グリッド）を設定した。南北軸を数字で、東西軸をアルファベットで表し、1グリッドの北東隅の交点をもってグリッド名としている。調査は、第一遺構面が残存する調査区南側を先行して行い、次いで北側を含めて第二遺構面の調査を行った。耕作土、および遺物の包含が極めて希薄とみられるII層（黒色土）の除去には重機を使用した。具体的に時期を判断しうる遺物の取り上げは平板測量により行い、その他の遺物はグリッドごとに一括して取り上げた。各グリッドラインには幅30cmのサブトレーナーを設定し層位確認を行った。第一遺構面では13～14世紀以降の掘立柱建物跡、溝状遺構、第二遺構面では、7～11世紀とみられる掘立柱建物跡・土坑などを検出した。明褐色土（IV層）はトレーナー調査の結果遺構、遺物ともに皆無であったため、III層上面をもって最終遺構面とした。

12月27日に全ての現場作業を終了した。調査面積は6510m²である。出土遺物の整理、報告書の作成は、現場開始と同時に着手し、平成14年3月末をもって終了した。
(岡野)

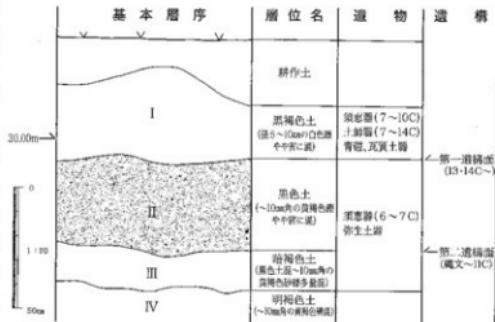
註（1）影山和雄編 2002『坪田遺跡』名和町文化財調査報告書第29集 名和町教育委員会

第2節 調査区内の堆積

遺跡は、名和川と東谷川が形成する河岸段丘上に立地する。調査地は段丘崖面の裾部に位置しており、東から西に向けて若干傾斜している。調査着手以前の調査地は、南側半分が宅地、北側半分は畑であったため、段丘崖面裾部はL字形にカットされ、表土直下にIV層がみられた。

基本的な堆積はI層～IV層である。すべてローム系統の堆積である。厚さ20～30cmの耕作土の直下にはI層（黒褐色土）が薄く堆積しており、7～14世紀の遺物を包含する。おもにF4グリッドから南側のみに残存する。II層（黒色土）直上では14世紀前後の遺構を検出したが、遺構埋土に褐灰色土を含むことから、本来的にはI層の上層に褐灰色土を含む土の堆積が存在したものと推測される。II層は、大山の火山堆積物が腐植の影響で黒化したものとみられ、大山北麓域の平地を中心に広く分布する堆積である。周辺地域の調査から、おおよそ縄文時代から平安時代頃までに堆積したことが想定される。III層上面で検出した遺構の本来的な遺構面はII層堆積中に存在すると思われるが、トレーナー調査では遺構面の存在を確認することはできなかった。

II層とIV層の間には漸移的にIII層の堆積がみられる。III層上面において落とし穴状土坑、7～11世紀とみられる遺構を検出した。C6グリッド以西では暗褐色土はみられず、暗灰褐色土が堆積する。IV層ではトレーナー調査を試みたが、遺構、遺物の存在は確認できなかった。（岡野）

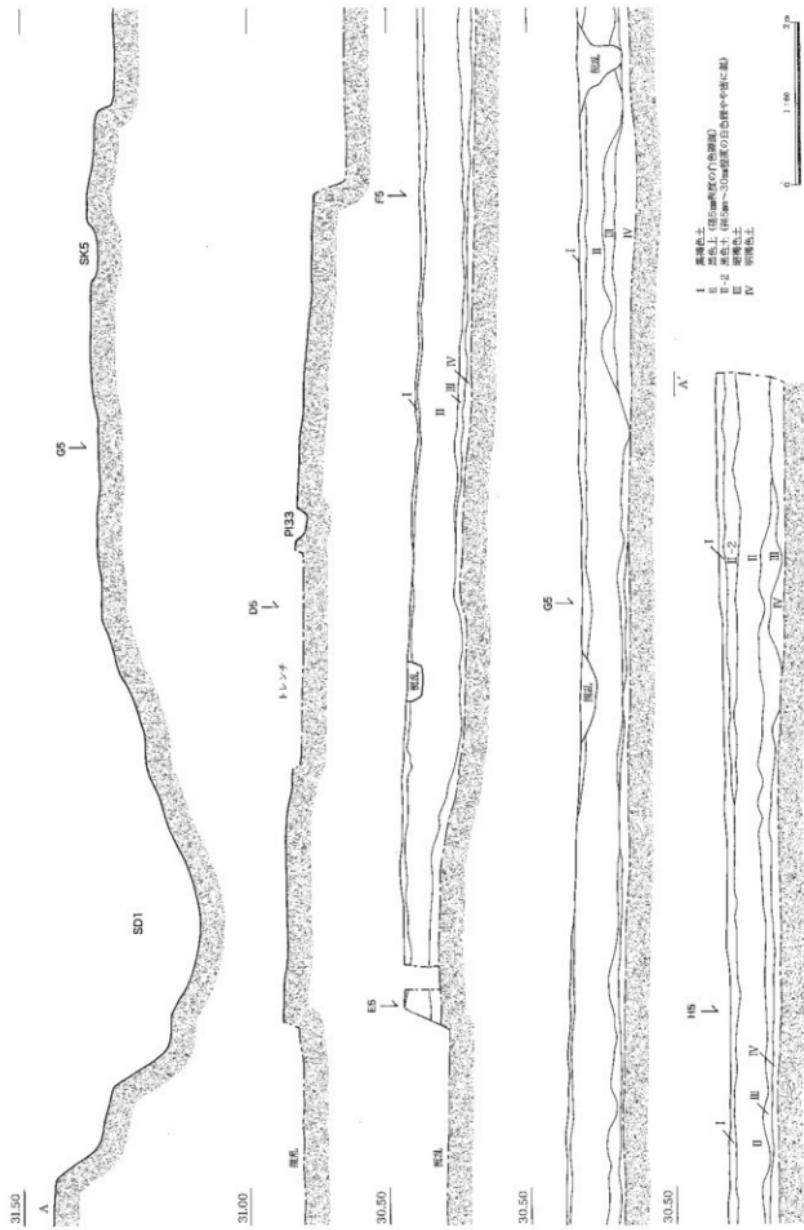


第4図 調査区内基本層序模式図

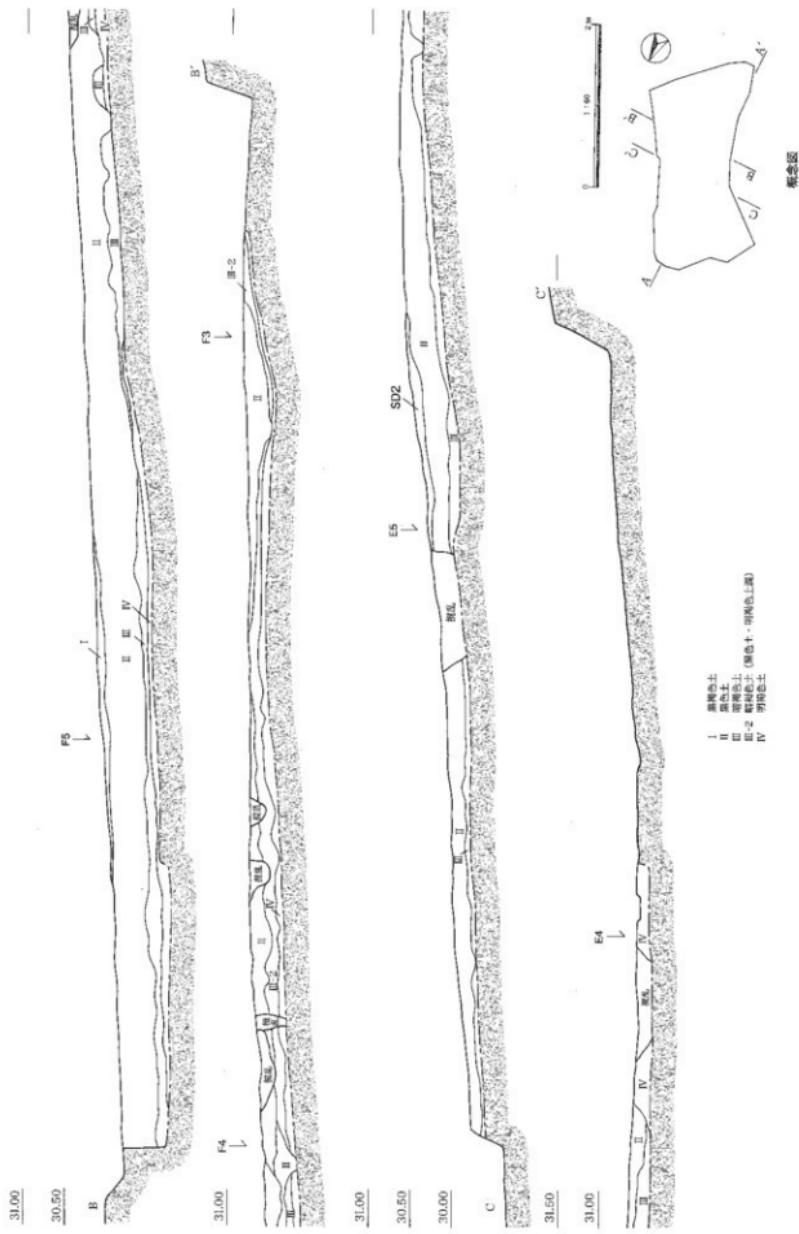


第5図 第一選擇面遺構分布図





第7図 調査区南北方向土層断面図



第8図 調査区東西方向土層断面図

第3節 第一遺構面(中世)の調査

II層(黒色土)上面において掘立柱建物跡1棟、溝状遺構1、土坑1を検出した。14世紀以降の所産である。

SB1 (第11・12図、P.L.5)

F4・G4グリッドに位置する3間×1間の掘立柱建物跡である。主軸方向は、N-24°-Wである。南側を除く各面には、柱穴に平行して比較的浅いピットが連続しており、底もしくは縁側が付随したと考えられる。付随部分を除く建物規模は、桁行約8.5m、梁行約4.2mである。主柱穴間は、桁行がP2-P3およびP7-P8は2.5m、その他が約3.0m、梁行は約4.2mである。土層断面から判断して、柱材は直径10~15cm前後と推察される。付随

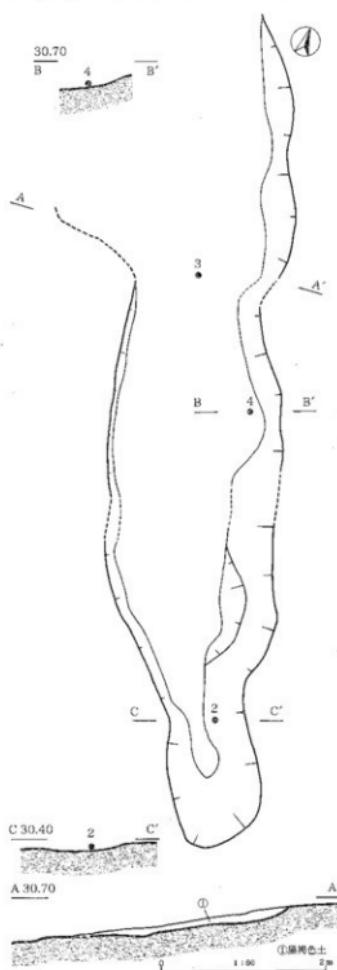
部分のピットは、間隔が一定しておらず配置も主柱穴に対応しない。南面には深いピットP23~P25があり何らかの設備が存在したものと考えられる。

P31から瓦質の甕とみられる破片1が出土した。北西側に位置するSD2は、褐灰色を含む埋土をもち、13~14世紀代の遺物が出土していることから、これを上限とする時期の所産とみられる。
(岡野)

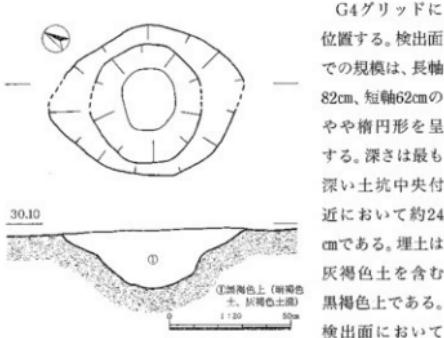
SD2 (第9図、P.L.4・19)

D4・E4グリッドに位置し、北西-南東方向を主軸とする。底面の標高は、北西側で約30.40m、南東側で約30.25mであり、南東側の方がわずかに低い。検出した規模は、全長10.3m、幅0.9m~2.2mである。検出面からの深さは、もっとも深い中央やや南東寄りで約20cmである。土層断面の観察からは、北西側において崖が大きく広がることがうかがえるが、西側の立ち上がりが削平されているうえに、北西端は搅乱によって破壊されているため、全形は不明である。埋土は黒褐色土であり、砂の混入など流水の痕跡は認められない。埋土中の底面直上から、土師質土器皿2、土師器窪口縁部3、瓦質土器羽釜4が出土した。出土遺物の時期には幅があるが、これらのうち羽釜4の年代は13~14世紀代に位置付けられ、埋没時期の上限を示すものと考えられる。
(君嶋)

SK4 (第10図、P.L.7)

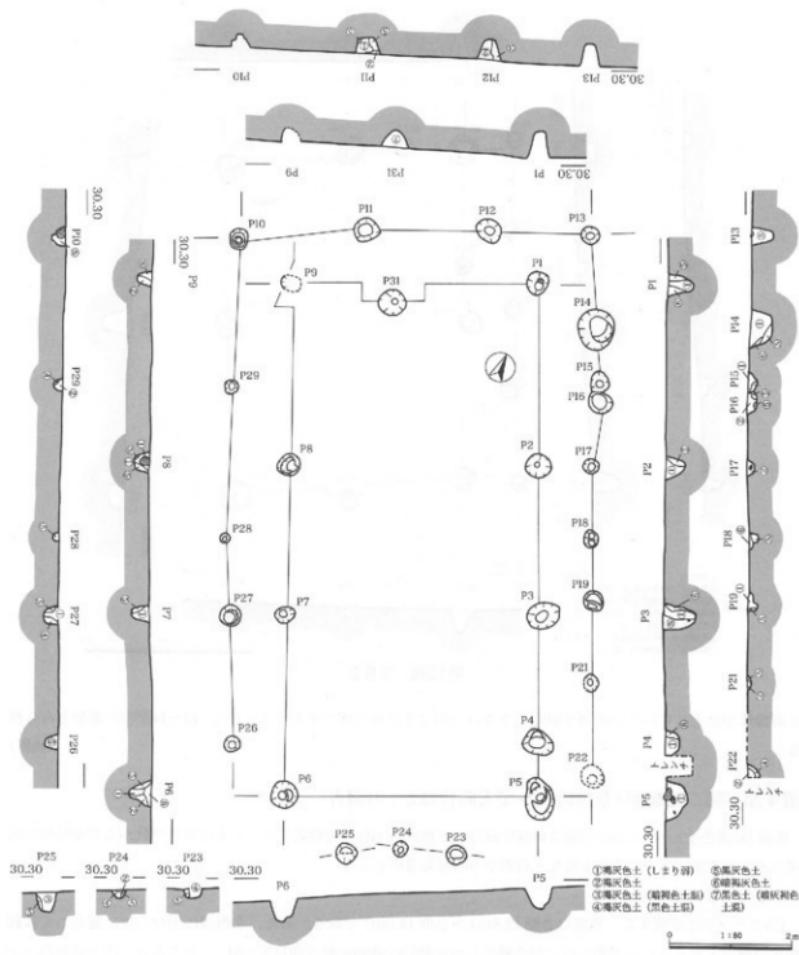


第9図 SD2

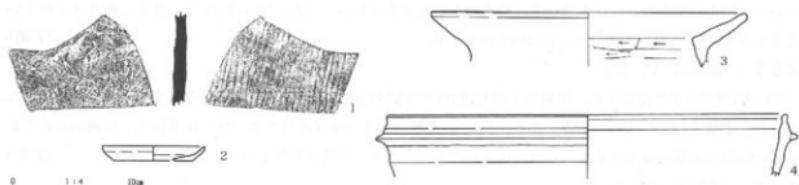


第10図 SK4

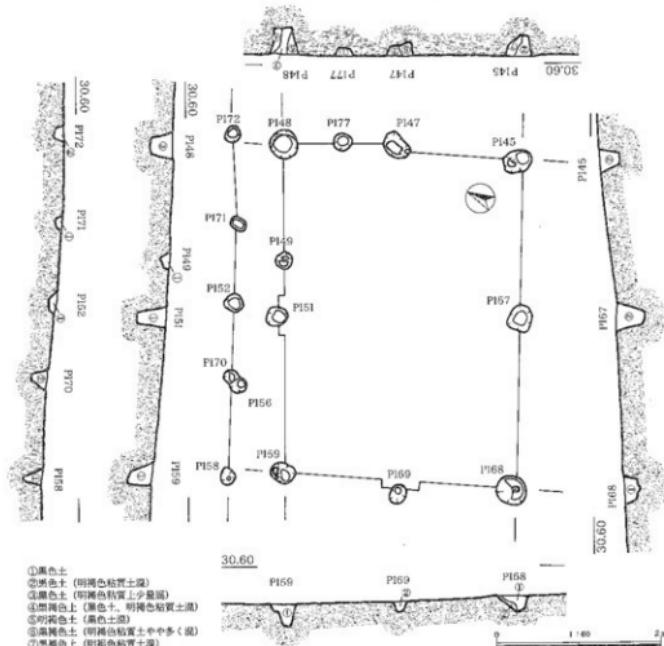
G4グリッドに位置する。検出面での規模は、長軸82cm、短軸62cmのやや橢円形を呈する。深さは最も深い土坑中央付近において約24cmである。埋土は灰褐色土を含む黒褐色土である。検出面において



第11図 SB1



第12図 SB1・SD2出土遺物



第13図 SB 2

土師器片が出土しているが時期を限定できない。SD 2と同様の埋土をもつことから、13~14世紀の遺構とみられる。

(岡野)

第4節 第二遺構面(奈良時代~平安時代ほか)の調査

III層(暗褐色土)上面において掘立柱建物跡2、土坑27、流路2を検出した。おもに奈良時代から平安時代の所産とみられるが、落とし穴状土坑など時期が不明確な遺構もある。

SB 2 (第13図、PL.11)

C5グリッドに位置する。規模は2間(2.8m)×2間(4.0m)である。また、北西側に平行して、底もしくは縁側状の施設と考えられる4間の柱穴列を検出した。建物全体の主軸方向はN-64°-Eである。埋土は黒色土・黒褐色土系の土であり、P148では柱痕が認められた。遺物は、P151とP156から土器片が数点ずつ出土した。小片のため固形化はできないが、奈良~平安時代のものと考えられる。また、P167がSK 3の埋土上に掘り込まれていることから、SK 3よりも新しいことは明らかである。

(君嶋)

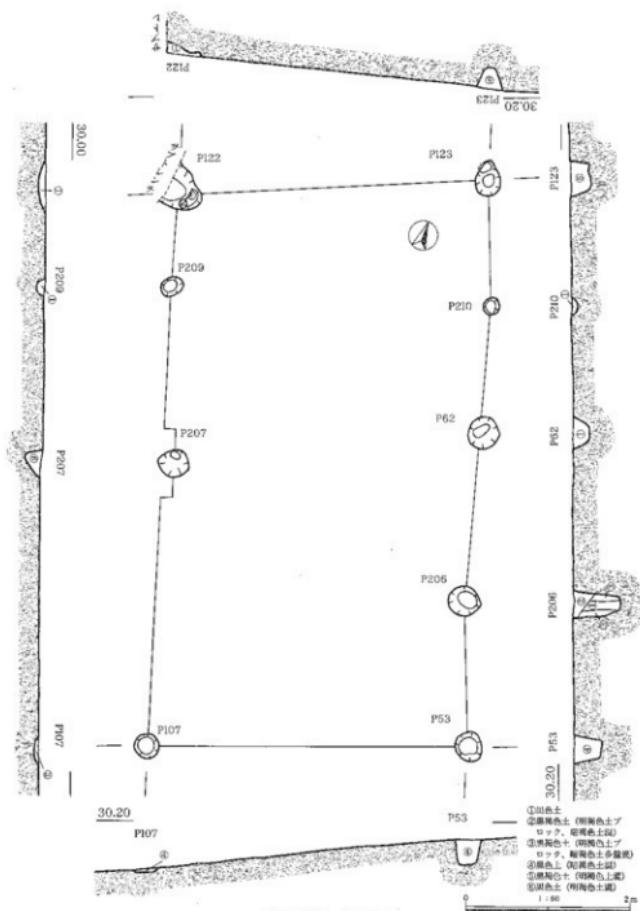
SB 3 (第14図、PL.13)

E4・F4グリッドに位置する。規模は1間(3.9m)×4間(7.0m)であるが、P206に対応する柱穴は検出できなかった。主軸方向はN-20°-Wであり、SB 2の主軸方向とはほぼ直交する。埋土は黒色土・黒褐色土系であり、P206では柱痕が認められた。遺物が出土していないため、時期は不明である。

(君嶋)

SK 1 (第17図、PL.7)

C5・C6グリッドに位置する。径78cmのほぼ円形を呈する。検出面からの深さは最大で55cmである。断面は袋



第14図 SB 3

状を呈する。底面中央に径19cm、深さ5cmのピットをもつ。遺物は出土しておらず、時期は不明であるが、底面ピットの存在から、落とし穴としての機能を持った造構と考えられる。

(君嶋)

SK 2 (第18図、PL. 7)

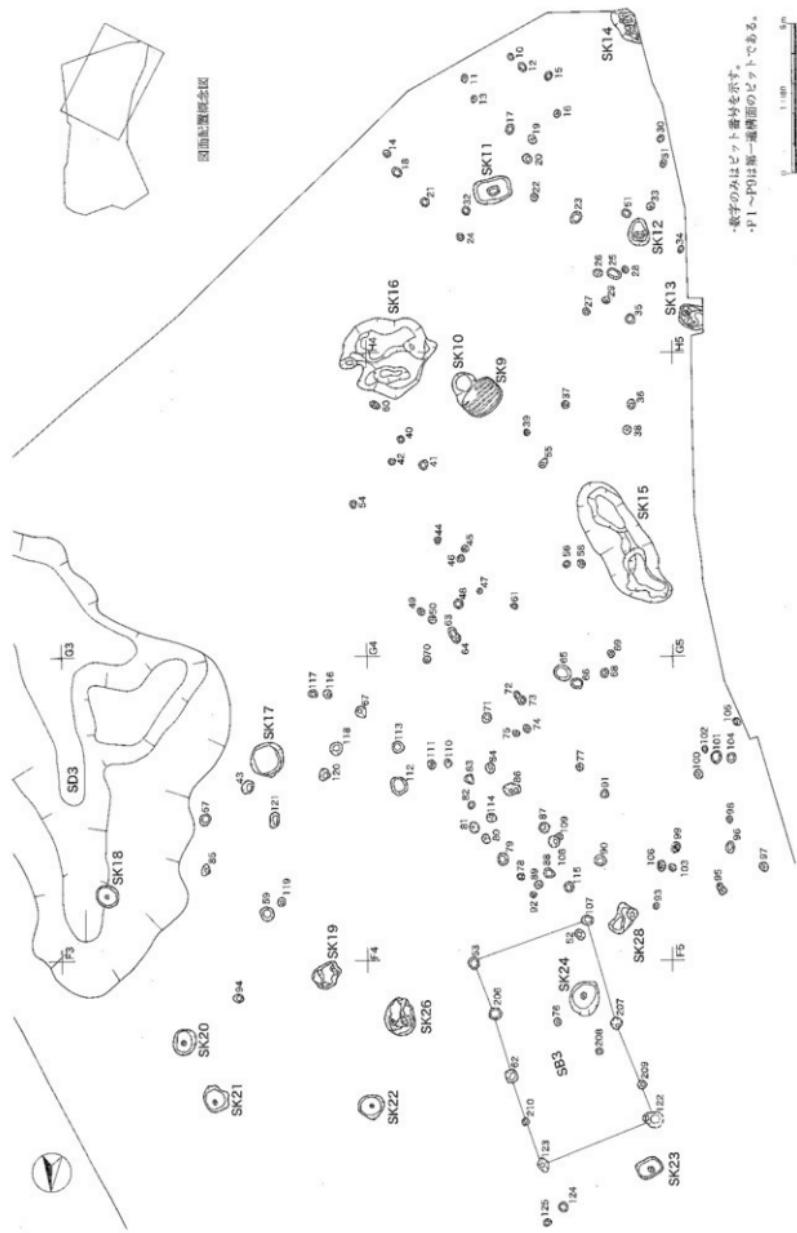
B6グリッドに位置する。長軸86cm、短軸74cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは最大で58cmである。底面の中央からやや西よりに、径13cm、深さ17cmのピットをもつ。遺物は出土していない。底面ピットの存在から落とし穴と考えられる。

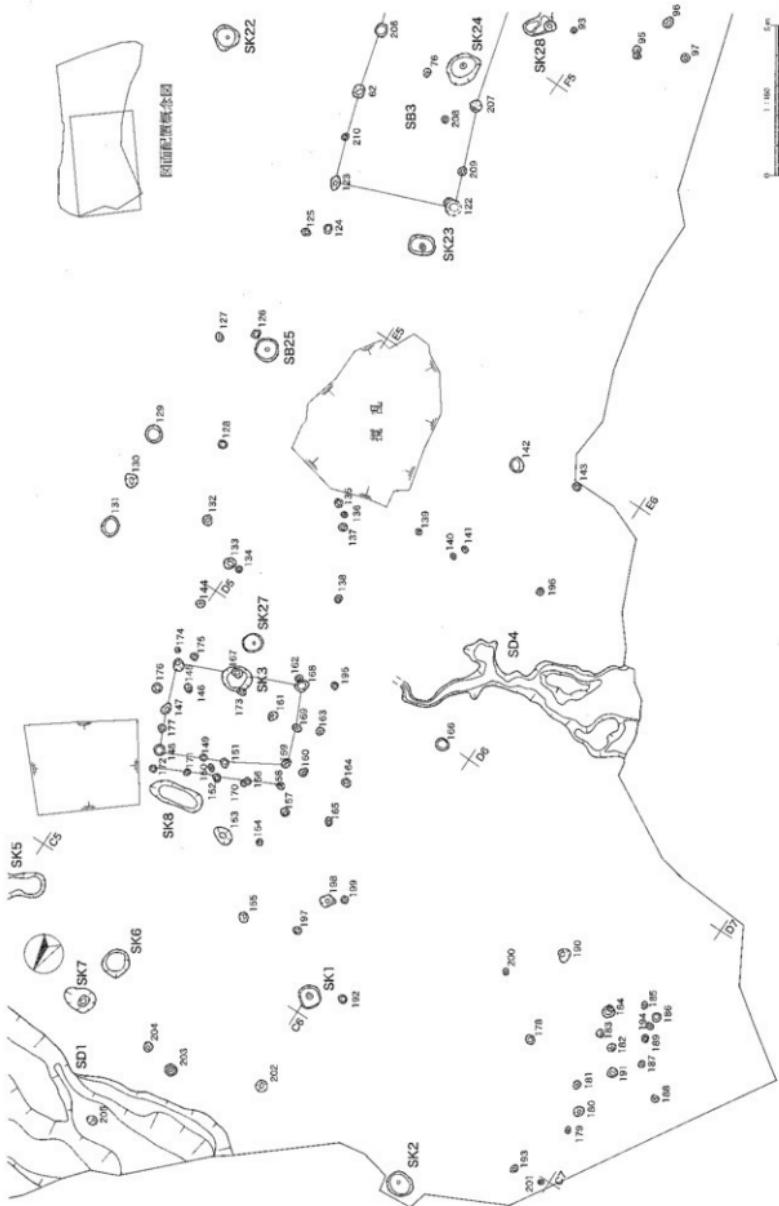
(君嶋)

SK 3 (第20図、PL. 7)

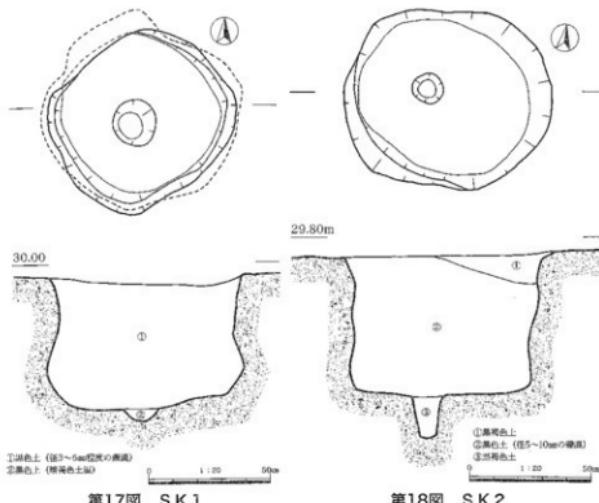
C5グリッドに位置する。検出面では長軸95cm、短軸78cmのほぼ円形である。底面は平坦であるが、西側は若干高い。僅かな土器片が出土したが時期を判断することはできない。SB 2 の P167に切られていることから、SB 2 より古い造構である。

(岡野)





第16図 第二造構面道構平面図2



第17図 SK1

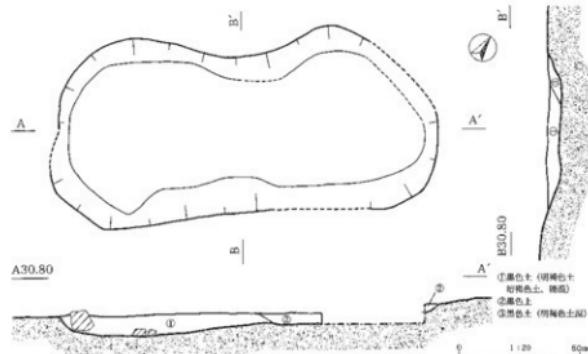
SK5 (第19図、P L.7)
B5グリッドに位置する。長軸1.55m、短軸65～76cmの不整な方形を呈する。底面は緩く傾斜しており、南西側がやや低くなる。底面は基盤層に包含される砾が露出しており若干の凹凸がみられる。遺物は出土していない。

(岡野)

SK6 (第21図、P L.7)
B5グリッドに位置する。検出面では直径約90cmの円形プランを呈する。底面はほぼ平坦である。埋土は自然堆積とは考え難い状況で堆積しており、人为的に埋められた可能性がある。柱穴ともみられるが、周囲に建物として対応するピットは確認できない。遺物は出土していない。

(岡野)

SK7 (第22図、P L.8)
B5グリッドに位置する。検出面では長軸1.1m、短軸0.8mの楕円形プランである。壁面の傾斜は緩慢で底面はい



第18図 SK2

第19図 SK5

びつである。埋土は自然堆積とみて矛盾しない。遺物は出土していない。

(岡野)

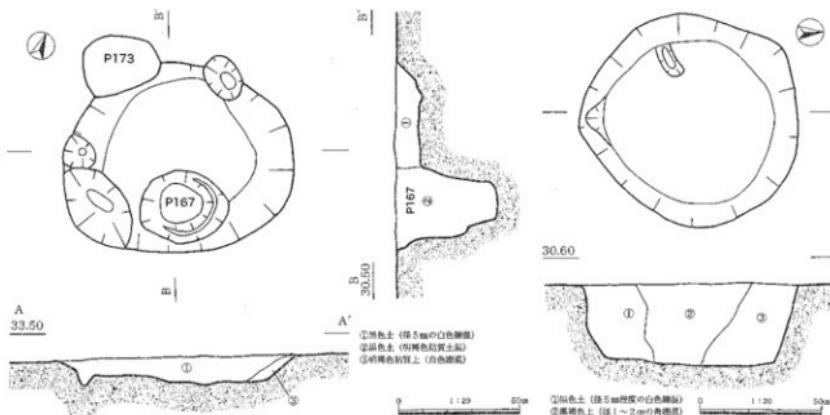
SK8 (第23図、PL.8)

C5グリッドに位置する。長軸177cm、短軸67cmの長楕円形を呈する。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは約20cmである。埋土の最下層は黒色のシルト層である。②、③層中には砂が混じり、砂と土との互層状を呈する。埋土中から土器片が数点出土した。いずれも小片のため図化できがないが、土師質の鍋の可能性がある破片を含む。

(君嶋)

SK9 (第24-25図、PL.8)

G4グリッドに位置する。隅丸方形のプランを呈し、検出面では長軸1.23m、短軸約1.0mを測る。南東側に位置するSK10を切って掘削されている。断面は、壁面が若干内傾し袋状を呈する。底面は、長軸1.25m、短軸1.05mの隅丸方形を呈する。その長軸方向に平行して幅7～9cm前後、深さ2～3cmの浅い溝が6本掘削されている。

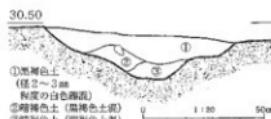


第20図 SK 3

埋土中から、土師質土器の壺5が出土している。底部は回転糸切り痕が僅かに残る。底径が6.4cm程度あることなどから11~12世紀の所産とみられ、遣構の埋没時期を示すものと考えられる。

(岡野)

SK 10 (第24・25図)



第22図 SK 7

G4グリッドに位置する。北西側はSK 9に切られるが、本来的には直径75cm前後の円形プランをもつと考えられる。底面は一辺50cm程度のいびつな隅丸方形である。底面は平坦である。南西側に近い壁面に貼り付く状態で須恵器の壺6が出土した。輪状つまみをもつタイプとみられ、7世紀末~8世紀中葉に相当する。

(岡野)

SK 11 (第26図、PL. 8)

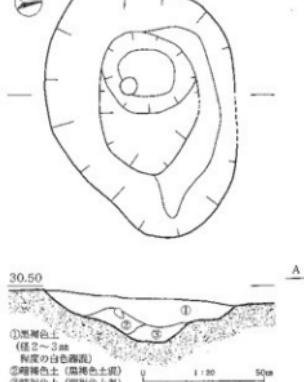
H4グリッドに位置する。長軸123cm、短軸80cmの隅丸長方形を呈する。深さは北側がやや深く、検出面から最大で63cmである。底面中央に長軸36cm、短軸28cm、深さ

第21図 SK 6

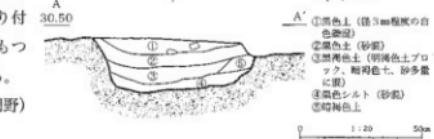
① 黒褐色土 (厚5mm程度の白色跡) ② 黑褐色土 (厚1~2mmの角擦迹)

1:20 50cm

1:20 50cm



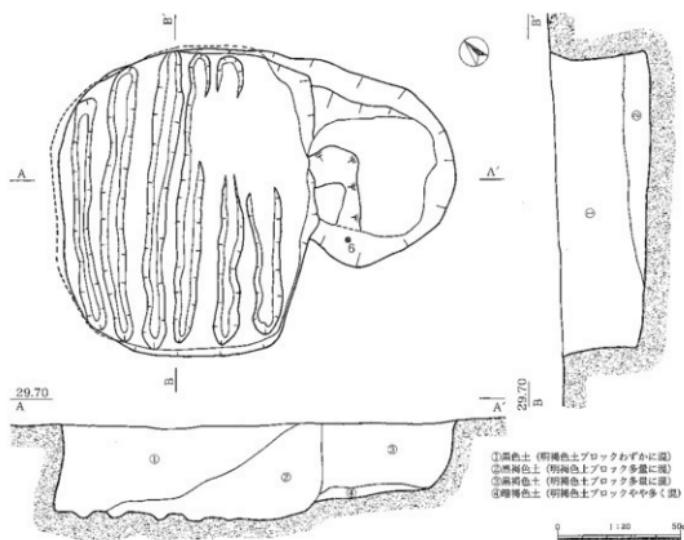
第22図 SK 7



第23図 SK 8

1:20 50cm

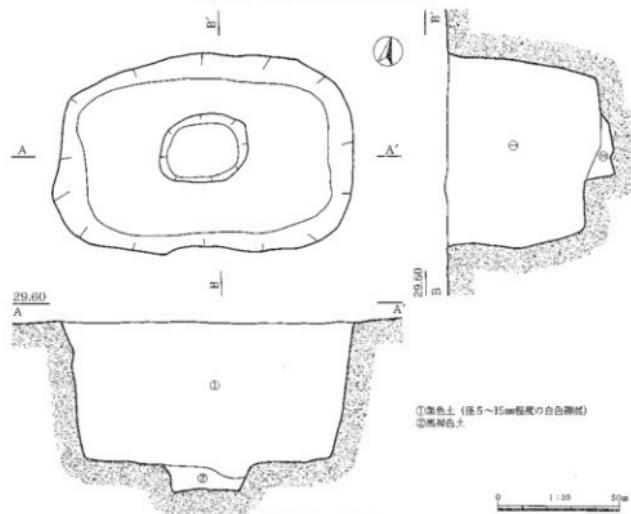
1:20 50cm



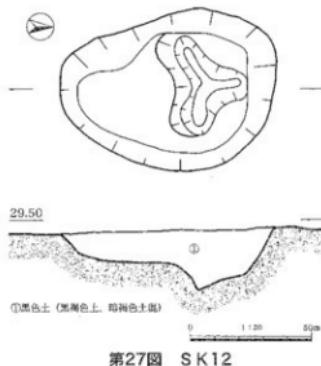
第24図 SK9、SK10



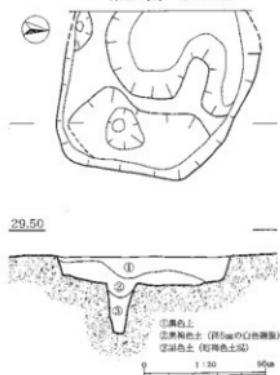
第25図 SK9、SK10出土遺物



第26図 SK11



第27図 SK12



第28図 SK13

12cmのピットをもつ。遺物は出土していない。
底面ピットの存在から落とし穴と考えられる。

(君嶋)

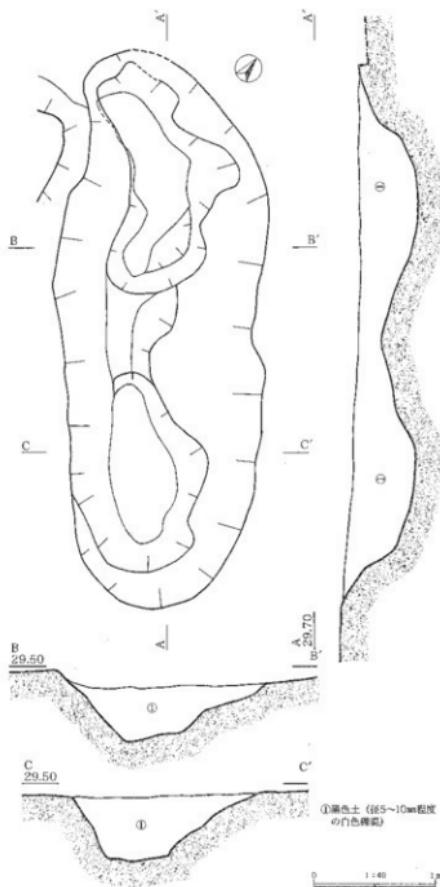
SK12 (第27図)

H4グリッドに位置する。検出面では長軸88cm、短軸67cmの楕円形プランをなす。底面は、長軸70cm、短軸50cmの不整な楕円形であり、北側はさらに深さ12cm程度の掘り込みが認められる。埋土は黒色土で堆積状況は把握できない。遺物は出土していない。

(岡野)

SK13 (第28図、PL.10)

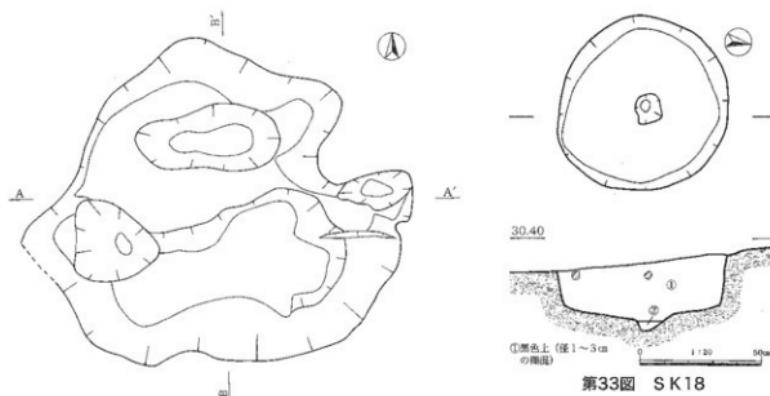
H5グリッドの調査区際に位置する。南北80cm、東西67cmのいびつな長方形を呈するが、西側は調査区外にかかっており、全体の形状は不明である。検出面から8~10cmの深さに底面をもつ。底面には不整形の浅い掘り込みが3箇所認められる。また、底面の東壁寄りに、17×15cm、深さ21cmのピットをもつ。落とし穴状土坑の底面ピットに類似するが、



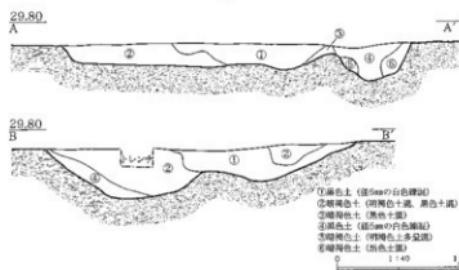
第29図 SK15



第30図 SK14



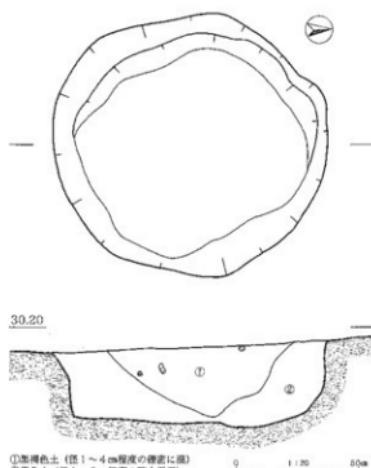
第33図 SK18



第31図 SK16



第34図 SK19



第32図 SK17

位置が偏っている。遺物が出土していないため、時期および性格は不明である。
(君嶋)

SK14 (第30図、PL.10)

14グリッド調査区南端に位置する。全形の1/3程度が検出され、本来的には直径80cm以上の不整な円形プランをもつと想定される。底面はいびつで凹凸をなす。埋土は黒色土に多量の明褐色土ブロックが混入しており長期間による自然堆積とは考えられない。樹木の倒壊による搅乱の可能性がある。遺物は出土していない。
(岡野)

SK15 (第29図、PL.10)

G4グリッドに位置する。北西—東方向に主軸をとり、長軸4.6m、短軸1.55~1.7mの長楕円形を呈する。中央部分が浅く、その両側が深くなっており、検出面からの深

さは北西側で40~50cm、南東側で約50cm、中央付近で20~35cmである。遺物が出土していないため、時期や性格は不明である。(君嶋)

SK16 (第31図、P L.10)

G4・H4グリッドに位置する。検出面では、南北1.3m、東西1.6m前後の不整なプランをもつ。底面は東西南北方向とも1.0m前後であるが、いびつであり凹凸が顕著である。埋土は暗褐色土、明褐色土などがブロック状に多量に混入しており、長期間にわたる自然堆積とは考え難く、樹木の倒壊による規則の可能性がある。ただ、土坑西寄りの④~⑥層に相当する部分は、土層の堆積状況からみて柱穴の可能性がある。遺物は出土していない。(岡野)

SK17 (第32図、P L.12)

F3グリッドに位置する。検出面では直径約1.1mの円形プランを有する。底面は平坦であり周囲の壁面はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は黒色を呈するが、①層には多量の礫が混入する。遺物は出土していない。(岡野)

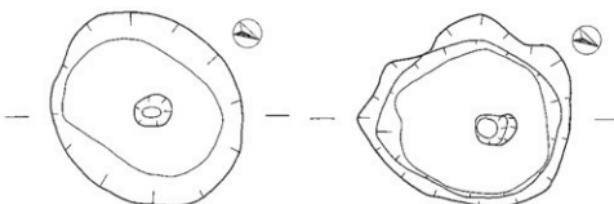
SK18 (第33図、PL.12)

F3グリッドに位置する。SD3と重複しているが、両者の先後関係は不明である。径74cmのほぼ円形を呈する。底面中央に、径12

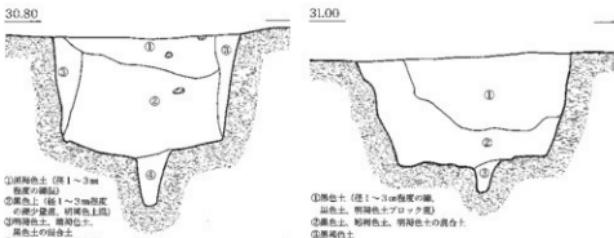
cm、深さ5cmのピットをもつ。遺物は出土していない。底面ピットの存在から落とし穴と考えられる。(君嶋)

SK19 (第34図、P L.12)

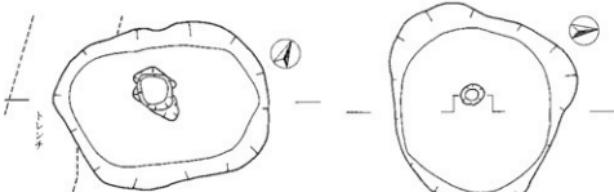
E3グリッドに位置する。検出面では、直径95cm前後の不整な円形プランを有する。底面プランもいびつであり、



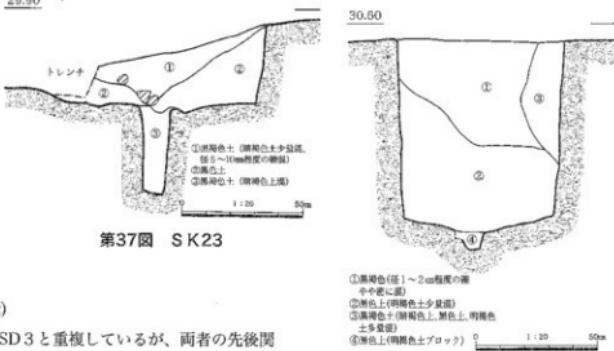
第35図 SK20



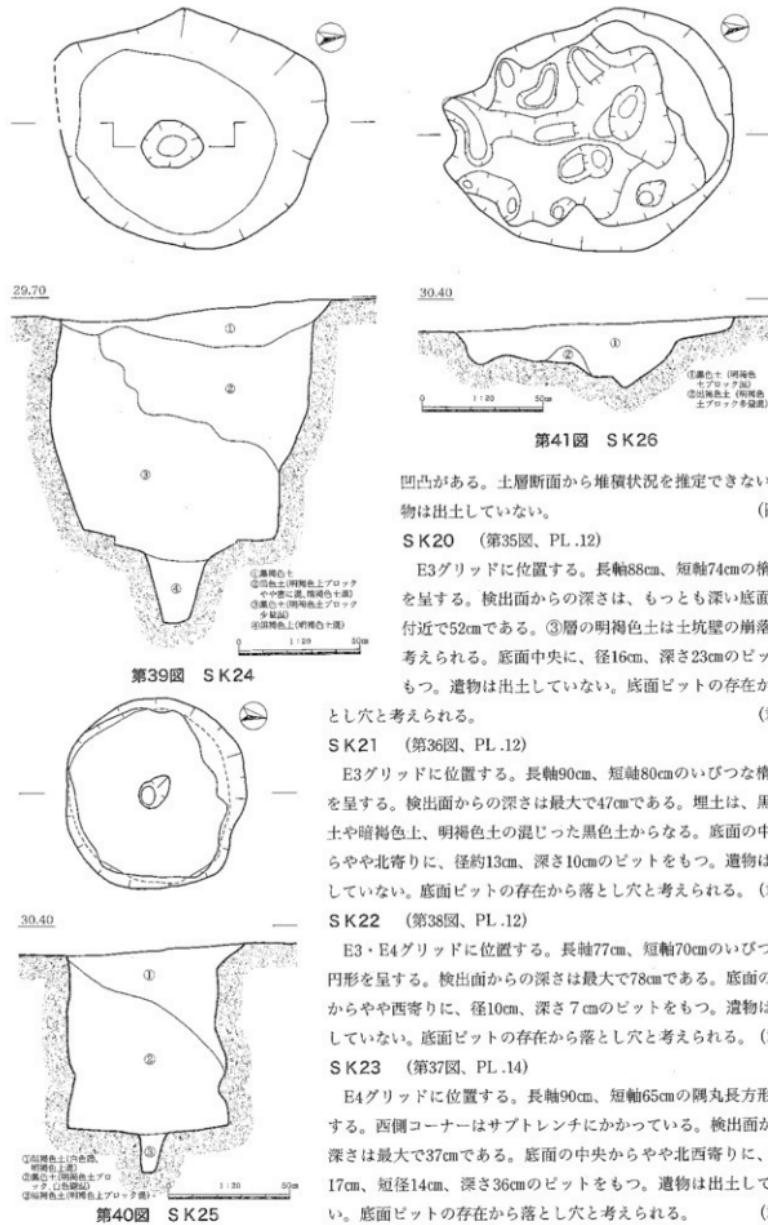
第36図 SK21



第37図 SK23



第38図 SK22



凹凸がある。土層断面から堆積状況を推定できない。遺物は出土していない。
(岡野)

S K20 (第35図、PL.12)

E3グリッドに位置する。長軸88cm、短軸74cmの梢円形を呈する。検出面からの深さは、もっとも深い底面中央付近で52cmである。③層の明褐色土は土坑壁の崩落土と考えられる。底面中央に、径16cm、深さ23cmのピットをもつ。遺物は出土していない。底面ピットの存在から落とし穴と考えられる。
(君鷲)

S K21 (第36図、PL.12)

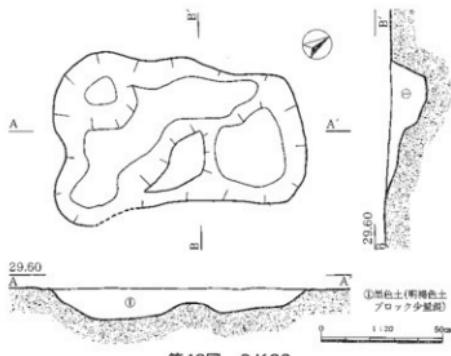
E3グリッドに位置する。長軸90cm、短軸80cmのいびつな梢円形を呈する。検出面からの深さは最大で47cmである。埋土は、黒褐色土や暗褐色土、明褐色土の混じった黒色土からなる。底面の中央からやや北寄りに、径約13cm、深さ10cmのピットをもつ。遺物は出土していない。底面ピットの存在から落とし穴と考えられる。(君鷲)

S K22 (第38図、PL.12)

E3・E4グリッドに位置する。長軸77cm、短軸70cmのいびつな梢円形を呈する。検出面からの深さは最大で78cmである。底面の中央からやや西寄りに、径10cm、深さ7cmのピットをもつ。遺物は出土していない。底面ピットの存在から落とし穴と考えられる。(君鷲)

S K23 (第37図、PL.14)

E4グリッドに位置する。長軸90cm、短軸65cmの楕円長方形を呈する。西側コーナーはサブトレンチにかかっている。検出面からの深さは最大で37cmである。底面の中央からやや北西寄りに、長径17cm、短径14cm、深さ36cmのピットをもつ。遺物は出土していない。底面ピットの存在から落とし穴と考えられる。
(君鷲)



第42図 SK28

SK24 (第39図、PL.14)

E4グリッドに位置する。長軸110cm、短軸100cmのややいびつな円形を呈する。検出面からの深さは最大で95cmである。底面の中央に長径25cm、短径20cm、深さ28cmのピットをもつ。遺物は出土していない。底面ピットの存在から落とし穴と考えられる。
(君嶋)

SK25 (第40図、PL.14)

D4グリッドに位置する。径80cmの円形を呈する。検出面からの深さは最大で78cmである。埋土は黒褐色土と黒色土からなる。底面の中央に、長径15cm、短径11cm、深さ16cmのピットをもつ。遺物は出土していない。底面ピットの存在から落とし穴と考えられる。
(君嶋)

SK26 (第41図、PL.14)

E4グリッドに位置する。長軸115cm、短軸100cmのいびつな梢円形を呈する。埋土は黒色土を主体として黒褐色土が混じる。遺物は出土していない。底面には凹凸が多数認められることから、倒壊した木根の痕跡の可能性もある。
(君嶋)

SK27 (第43図、PL.14)

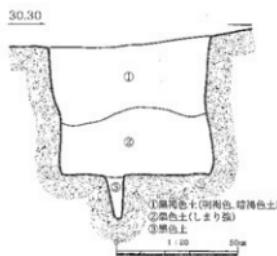
C5グリッドに位置する。長軸68cm、短軸58cmの梢円形を呈する。検出面からの深さは最大で58cmである。埋土は黒褐色土と黒色土からなる。底面の中央からやや西寄りに、長径12cm、短径8cm、深さ18cmのピットをもつ。遺物は出土していない。底面ピットの存在から落とし穴と考えられる。
(君嶋)

SK28 (第42図、PL.14)

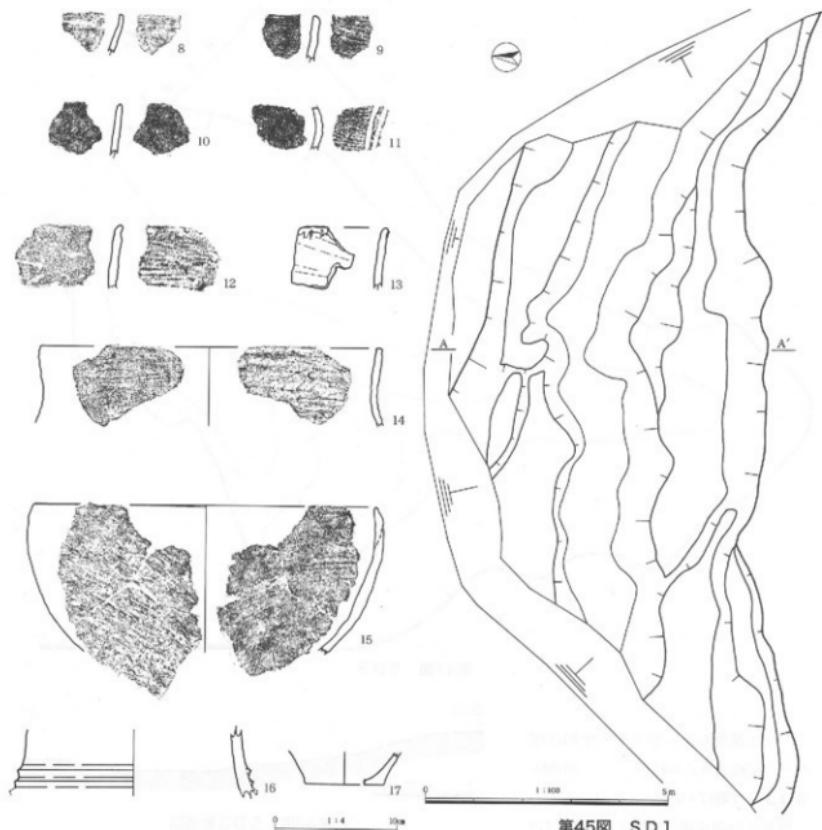
F4グリッドに位置する。検出面では長軸1.0m、短軸0.6mの方形を呈する。底面プランはいびつであり凹凸がある。埋土の堆積状況は把握できない。遺物は出土していない。
(岡野)

SD1 (第44・45図 PL.15)

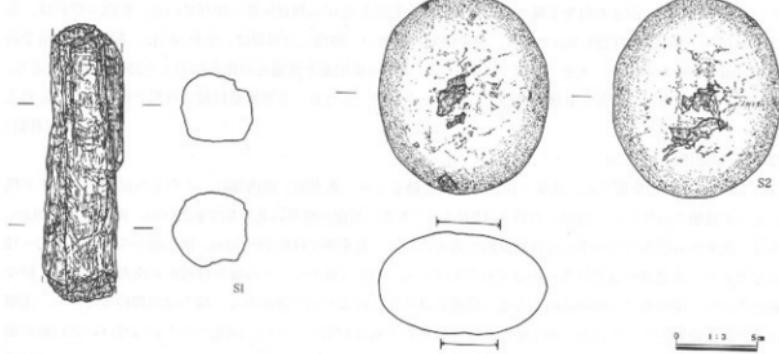
B4・B5グリッドに位置する。検出面では幅5.5~6.2m前後、底部までの深さ約1mである。埋土はおもに砂疊であるが、④層には植物遺体を多量に含み黒褐色を呈する。南側河岸の上層は擾乱を受けており、8~10世紀の須恵器のほかコンクリート片が多量に混入する。西側が低くなる地形から判断して、東から西に流れる自然流路と考えられる。埋土中のおもに④層~⑧層から、繩文土器片約40点、弥生時代中期とみられる土器片2点、棒状の石製品1点が出土した。繩文土器は後期から晩期とみられる粗製土器が大半であるが、11は深鉢の胴部とみられ、後期布勢式前後に位置づけられる。棒状石製品は④層もしくは⑥層から出土した。石材は泥質片岩であり、大山北麓域には分布しない。分析の結果、最も地理的に近い産出地である日野川上流域のものではないことが指摘された (特論参照36P)。繩文後期~晩期の土器とともに出土していることから、石棒の可能性を指摘してお



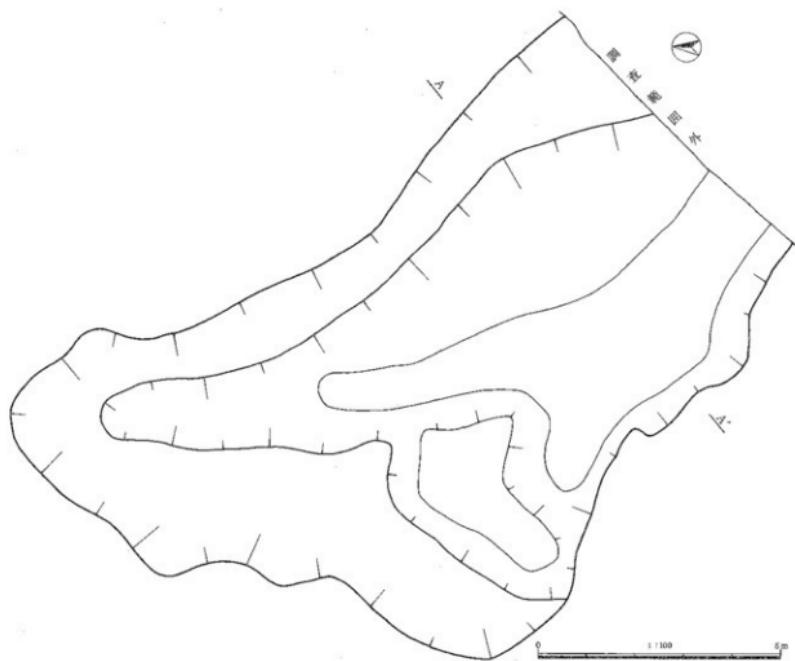
第43図 SK27



第45図 SD 1



第46図 SD 1 出土遺物



第47図 SD 3

く。出土遺物から、弥生時代中期に埋没した流路と考えられる。
（岡野）

SD 3 (第47・48図)

調査区の南東隅、F2・F3・G2・G3

グリッドに位置する。南北方向を主軸とし、南東方向へ屈曲しながら調査区外へ伸びている。底面の標高は、北端で約30.05m、南東端で約29.70mであり、南東側の方が低い。検出した規模は、全長14.2m、幅4.9～8.9mである。検出面は東岸から西岸へ大きく傾斜しているが、東岸の検出面と底面との比高はおよそ55cm～90cmである。遺物は出土していない。上部をII層（黒色土）がバックしているため、II層堆積以前の時期に形成されたと考えられる。

SD 4 (第51図、PL.13)

D5・D6グリッドに位置する。北東～南西方向に主軸をとる。北東端と南西端は、それぞれ試掘トレンチと掘乱によって破壊されており、検出した長さは約7.5mである。底面の標高は北東端で約29.8m、南西端で約29.0mであり、北東から南西方向へ流れた自然流路と考えられる。北東側では幅20～50cm、検出面からの深さは10～15cmほどであり、北東端付近では北へ小さく蛇行している。D5・D6グリッドの境界付近から南西側へ向けて徐々に幅が広がり、南西端では幅約3mとなる。底面には島状の高まりが2箇所ある。埋土は黒褐色土であり、①層には礫や炭化物をわずかに含む。埋土中からは十数点の土器片が出土したが、図化できたのは受け口状口縁の築18である。13～14世紀前後に位置付けられ、埋没時期の上限を示すものと考えられる。

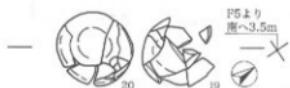
A-A'



第48図 SD 3断面図



第49図 SD 4出土遺物



第50図 II層遺物出土状況および出土遺物



第51図 SD 4

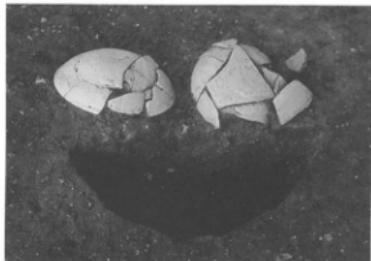
第5節 包含層・調査区内出土遺物

I層出土遺物 (第53・54図、PL.16~20)

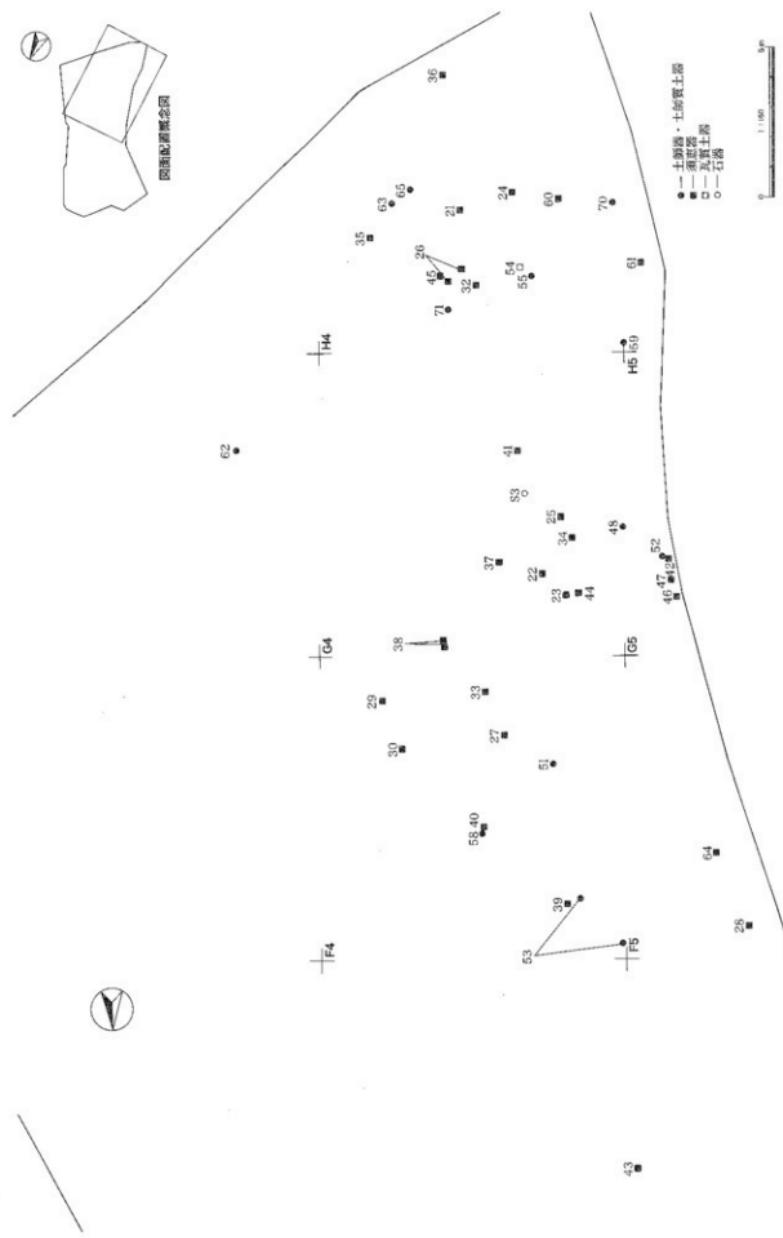
今回の調査で出土した遺物はコンテナ6箱分であるが、そのうちI層(黒褐色土)から出土した遺物が最も多い。これらのうち、一部の出土位置を第52図に示した。ほとんどが破片での出土である。遺物の時期は、S 3の打製石斧など古墳時代以前のものを含むが、主体は7世紀以降である。輪状のつまみをもつ壺蓋29・30、高台壺38などは7世紀末～8世紀中葉、口縁がやや内湾する壺身21～26は8世紀後半、口縁が外反し、内面の頸部以下をヘラ削りする土師器壺48～51、53、57、58は8～10世紀前後に位置付けられる。63・65・66は底部をヘラ切りして赤彩を施しており、伯耆国第二段階(9世紀後半)に相当する。32～37、43～47、62、67～68、70の底部は回転糸切り後未調整であり、10世紀よりさかのぼるものではない。71は土鍤である。瓦質の羽釜54、受け口状口縁の鍋55・56は13～14世紀のものと考えられ、包含層出土遺物の中では最も新しい時期を示すものである。(君嶋)

II層出土遺物 (第50・55図、PL.16~20)

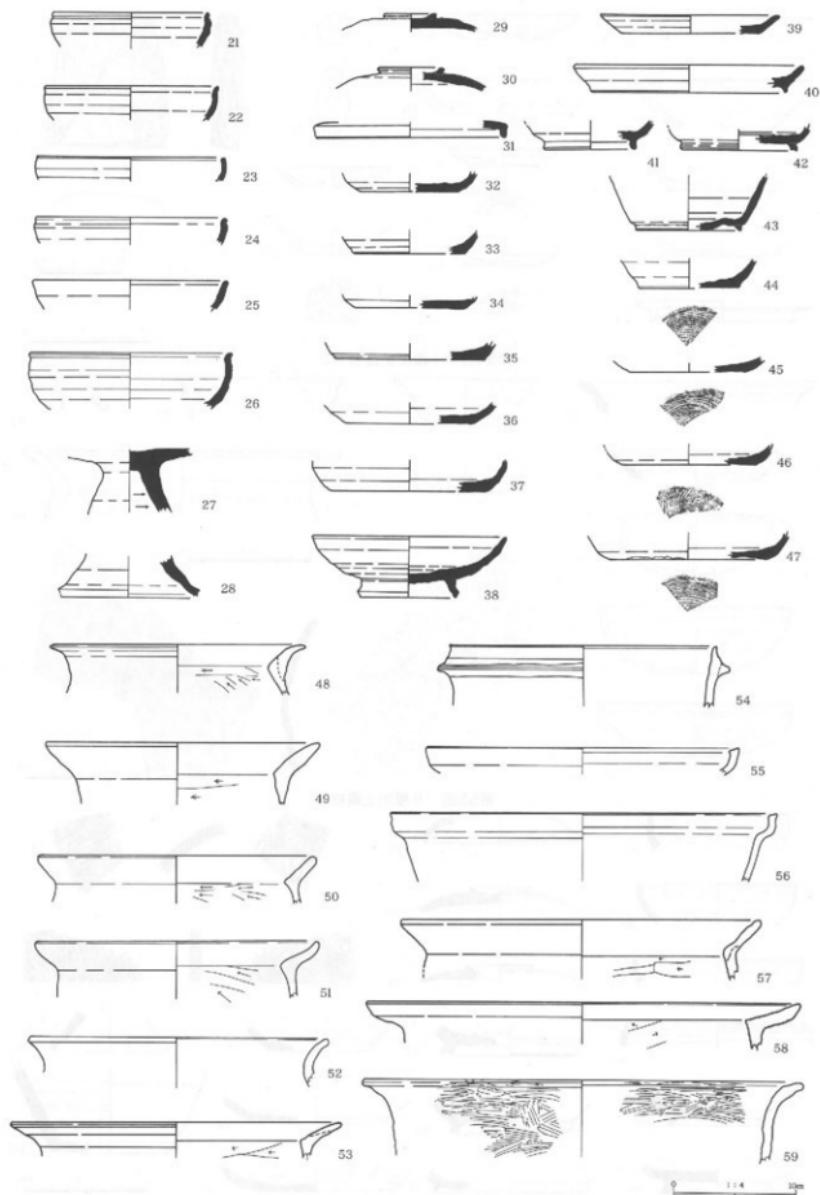
出土点数はI層に比べて少ないが、土師器74・75、土師質土器77、須恵器蓋19・20などほぼ完形で出土したものがある。19・20は並んだ状態で出土しており(第50図)、埋葬施設の上器枕であった可能性がある。この他にも、本来遺構にともなっていた遺物が含まれているものと推測さ



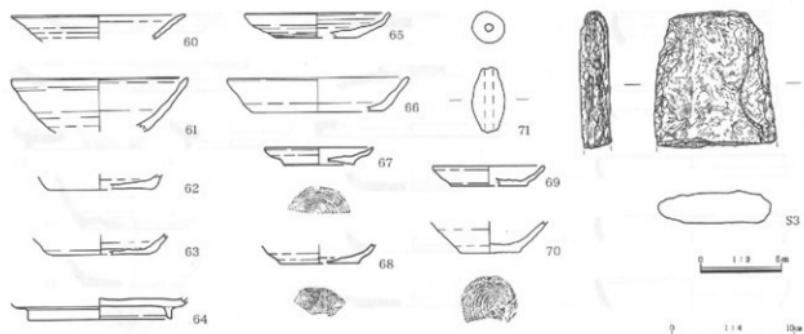
II層遺物(19・20)出土状況(南東から)



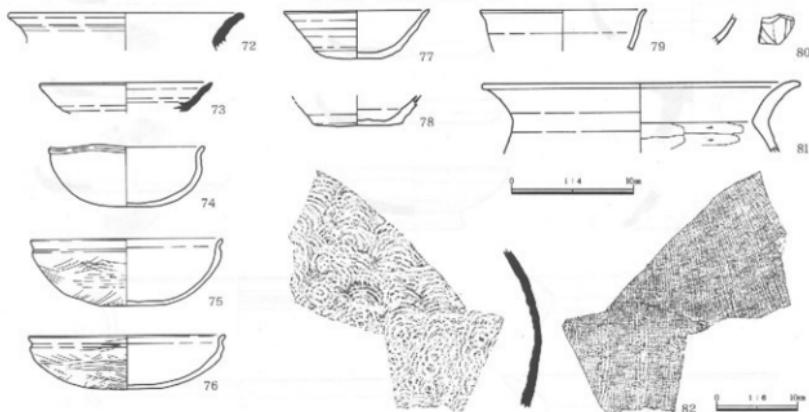
第52図 1層出土遺物分布図



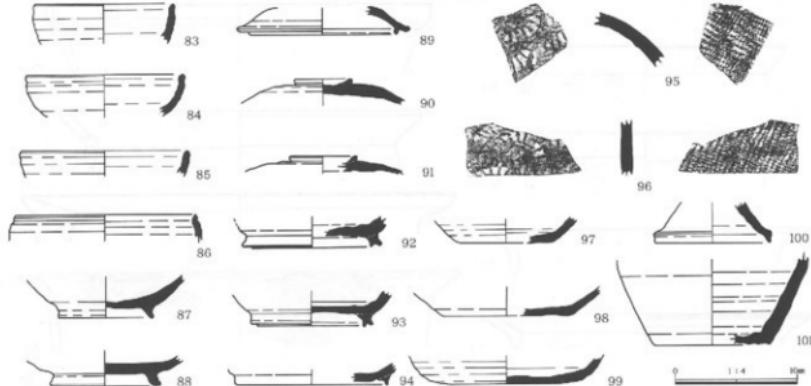
第53図 I層出土遺物 1



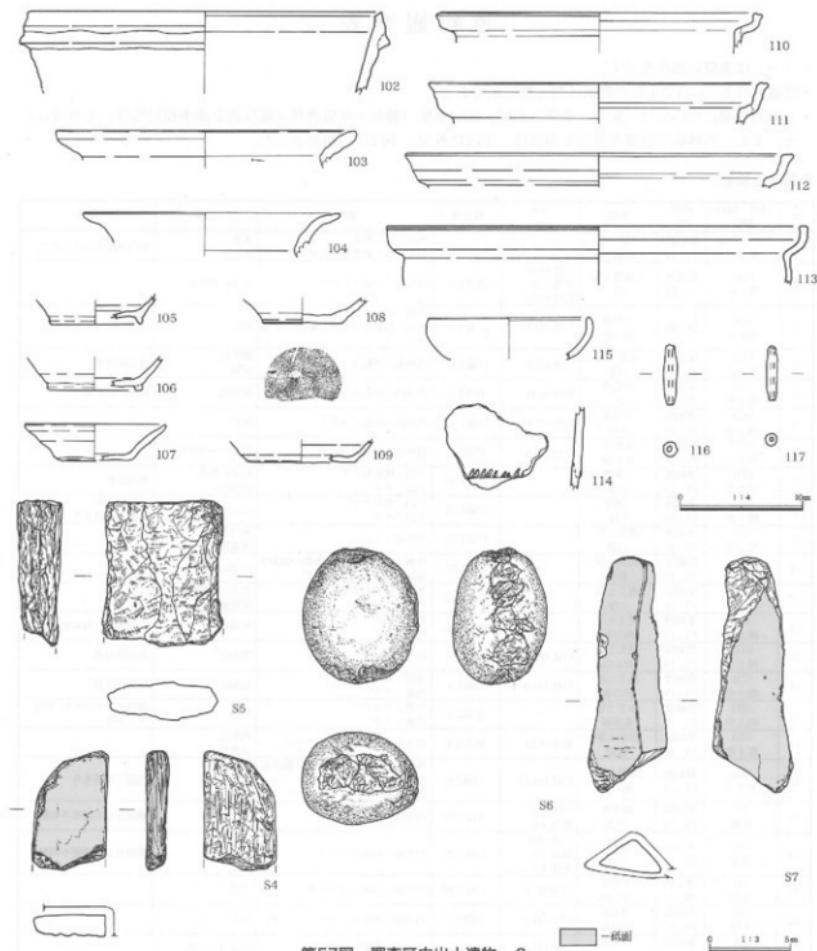
第54図 I層出土遺物 2



第55図 II層出土遺物



第56図 調査区内出土遺物 1



第57図 調査区内出土遺物 2

れる。74~76は古墳時代中期に位置付けられる。77・78は底部ヘラ切りで、押圧により底部が凸面をなす。時期は9世紀後半~10世紀前半に相当する。青磁碗79・80は、おそらく本来的にはⅡ層上面付近から掘り込まれた遺構埋土中に存在したものと考えられる。80は篇述弁文をもつ龍泉窯系の碗である。
(君嶋)

調査区内出土遺物 (第56・57図、PL. 16~20)

耕作土や攪乱土層から出土した遺物である。114は弥生前期の甕で、段部に刻みを施す。須恵器壺95・96の内面にみられる当て具痕は、山陰地方の平安時代の須恵器に特徴的な車輪文に類似するが、当て具の中央部分の模様が不鮮明である。105・107・109は伯耆国第二段階、羽釜102や110~113の鍋は13~14世紀代に位置付けられる。圓化できなかったが近世の陶器片も少量出土している。石器・石製品では打製石斧S 5、敲石S 6、砥石S 4・S 7が出土している。S 4は裏面にノミ状工具による加工痕が残る。
(君嶋)

遺物観察表

- 「→」は調整の順序を示す。
- 法量のうち、()で示した数値は復元推定値である。
- 土器の色調については「新版 標準土色帖」2001年版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）を参考にした。また、内外面で色調が異なる場合は、上段に外面、下段に内面を示した。

土器・土製品

No.	遺物・地区 位置	厚さ PL	器種	法量 (cm)	残存率	調整	色調	備考
1	SB 1 P21 埋土中	第12回 PL. 19	瓦質土器 壺形部	口径(5.4) 高さ(1.25) 底径(6.4)	—	外面：平行押き 内面：当て貝殻をナデ消す	灰褐色 灰白色	底部同軸糸切り→ナデ
2	SD2 埋土中	第12回 PL. 19	土質質土器 壺	口径(2.47) 高さ(1.25) 底径(6.4)	底部1/5	内外面：回転ヨコナデ	にい青褐色	
3	SD2 埋土中	第12回 PL. 19	土質質 壺口縁	口径(24.7)	口縁1/5	外側：回転ヨコナデ 内側：回転ヨコナデ、底部ヘラケ メリ	橙色	
4	SD2 埋土中	第12回 PL. 19	瓦質土器 臼形	口径(32.8)	口縁1/10	内外面：回転ヨコナデ	暗灰褐色 灰色	外面抹付着
5	SK9 埋土中	第25回 PL. 19	須恵器 片	底径(6.4)	底部1/4	内外面：回転ヨコナデ	灰褐色	底部削輪糸切り
6	SK10 埋土中	第25回 PL. 19	須恵器 片	口径(17.6)	口縁1/10	内外面：回転ヨコナデ	灰色	
7	SK10 埋土中	第25回 PL. 19	須恵器 片口縁	口径(17.6)	口縁1/6	内外面：回転ヨコナデ	暗オリーブ灰色	
8	SD1 埋土中	第46回 PL. 19	土質質 片	—	口縁1/16	外側：横位ハメ状条痕→沈線2 以上無 内面：ナデ	にい青褐色 灰褐色	外面赤彩
9	SD1 埋土中	第46回 PL. 19	土質質 片	—	口縁1/16	外側：横位ナデ	にい青褐色	内外面赤彩 外面に墨斑あり
10	SD1 埋土中	第46回 PL. 19	圓文土器 片	—	口縁1/16	内外面：ナデ	灰白色 浅黄褐色	
11	SD1 埋土中	第46回 PL. 19	圓文土器 片脚部	—	脚部1/12	外側：横位ハメ状条痕→沈線2 以上無 内面：ナデ	にい青褐色	調文後期
12	SD1 埋土中	第46回 PL. 19	圓文土器 片	—	口縁1/12	外側：ナデ、赤痕 内面：ナデ	にい青褐色 暗灰褐色	
13	SD1 埋土中	第46回 PL. 19	圓文土器 片口縁	—	口縁1/16	外側：斜位ナデ 内面：ナデ	灰黃褐色	口唇外面に刻みを施す
14	SD1 埋土中	第46回 PL. 19	圓文土器 片口縁	口径(27.9)	口縁1/8	内外面：ナデ	黑褐色	外面抹付着
15	SD1 埋土中	第46回 PL. 19	圓文土器 片口縁	口径(28.0)	口縁1/8	外側：斜位ナデ 内面：ナデ	暗褐色	外面抹付着
16	SD1 埋土中	第46回 PL. 19	寄生土器 壺部	—	壺部1/6	外側：ヨコナデ 内面：ナデ	灰色	外面に突起2条以上貼付 寄生中期
17	SD1 埋土中	第46回 PL. 19	寄生土器 壺部	底径(6.6)	底部1/4	内外面：ナデ 底外側：ナデ	褐灰色 浅黄褐色	
18	SD4 埋土中	第49回 PL. 19	瓦質土器 片口縁	口径(26.8)	口縁1/8	外側：口縁回転ヨコナデ、頸部ナデ 内面：板ナデ	灰白色	内面に墨斑あり
19	F5 II層	第50回 PL. 16	須恵器 片	口径 14.2 高さ 4.4	ほぼ完形	内外面：回転ヨコナデ	灰白色 浅黄褐色	奉誠著しく調整不明瞭
20	F5 II層	第50回 PL. 16	須恵器 片身	口径 13.9 高さ 4.6 底径 4.5	ほぼ完形	内外面：回転ヨコナデ	灰白色	奉誠著しく調整不明瞭
21	H4 I層	第53回 PL. 17	須恵器 片口縁	口径(12.8)	口縁1/10	内外面：回転ヨコナデ	灰色	
22	G4 I層	第53回 PL. 17	須恵器 片口縁	口径(14.2)	口縁1/8	内外面：回転ヨコナデ	灰色	
23	G4 I層	第53回 PL. 17	須恵器 片口縁	口径(15.8)	口縁1/8	内外面：回転ヨコナデ	暗オリーブ色	
24	H4 I層	第53回 PL. 17	須恵器 片口縁	口径(15.3)	口縁1/12	内外面：回転ヨコナデ	暗灰色	
25	G4 I層	第53回 PL. 17	須恵器 片口縁	口径(15.8)	口縁1/16	内外面：回転ヨコナデ	灰黄色 灰色	
26	H4 I層	第53回 PL. 17	須恵器 片	口径(16.3)	口縁1/5	外側：斜位ヘラケズリー→回転ヨコナデ 内面：回転ヨコナデ	暗オリーブ色	
27	F4 I層	第53回 PL. 17	須恵器 片	—	脚部	外側：ナデ 内面：ケズリー→ナデ	灰色	
28	F5 I層	第53回 PL. 17	須恵器 片	—	脚部1/12	外側：回転ヨコナデ 内面：ケズリー→ナデ	灰色	
29	F4 I層	第53回 PL. 17	須恵器 片	—	つまみ3/4	内外面：回転ヨコナデ	灰色	
30	F4 I層	第53回 PL. 17	須恵器 片	—	つまみ1/8	内外面：回転ヨコナデ	灰色 浅黄褐色	
31	F4 I層	第53回 PL. 17	須恵器 片	口径(15.5)	口縁1/8	内外面：回転ヨコナデ	灰色 暗灰褐色	

No.	遺物・部位 層位	押岡 PL.	器種	法量 (cm)	残存率	調査	色調	備考
32	H4 I層	第53回 PL. 17	須恵器 杯	底径(8.1)	底部1/8	内外面：回転ヨコナデ	暗灰褐色	底部回転系切り
33	F4 I層	第53回	須恵器 片	底径(9.2)	底部1/8	内外面：回転ヨコナデ	灰色	底部回転系切り
34	G4 I層	第53回 PL. 17	須恵器 杯	底径(9.0)	底部1/8	内外面：回転ヨコナデ	暗灰色	底部回転系切り
35	H4 I層	第53回 PL. 17	須恵器 杯	底径(12.1)	底部1/8	内外面：回転ヨコナデ	灰色	底部回転系切り
36	H4 I層	第53回 PL. 17	須恵器 杯	底径(11.5)	底部1/8	外表面：ナデ 内表面：回転ヨコナデ	灰色	底部回転系切り
37	G4 I層	第53回 PL. 17	須恵器 片	底径(12.6)	底部1/6	内外面：回転ヨコナデ	灰色	底部回転系切り
38	G4 I層	第53回 PL. 17	須恵器 高台杯	口径(15.7) 高さ 5.2 底径(7.8)	底部1/3	内外面：回転ヨコナデ 脚付面：ナデ	オリーブ黒色 灰色	外側に自然輪付着
39	F4 I層	第53回 PL. 17	須恵器 片	口径(14.6) 高さ 2.5 底径(11.6)	口径1/5	内外面：回転ヨコナデ 脚付面：ナデ	灰色	
40	F4 I層	第53回 PL. 17	須恵器 高台付皿	口径(18.6) 高さ 2.3 底径(16.2)	底部1/8	内外面：回転ヨコナデ 底外面：ナデ	灰黃褐色	
41	G4 I層	第53回 PL. 17	須恵器 高台片	底径(7.4)	底部1/4	内外面：回転ヨコナデ	灰色 灰黃褐色	
42	G5 I層	第53回 PL. 17	須恵器 両耳片	底径(9.8)	底部1/8	内外面：回転ヨコナデ	灰色 灰白色	
43	E5 I層	第53回 PL. 17	須恵器 高台片	底径(8.6)	底部1/3	内外面：回転ヨコナデ	灰色	底部回転系切り
44	G4 I層	第53回 PL. 17	須恵器 片	底径(8.0)	底部1/4	内外面：回転ヨコナデ	灰色	底部回転系切り
45	H4 I層	第53回 PL. 17	須恵器 片底部	底径(9.2)	底部1/6	外側不明、内側ナデ	灰色	底部回転系切り
46	G5 I層	第53回 PL. 17	須恵器 片底部	底径(11.2)	底部1/4	内外面：回転ヨコナデ	灰色	底部回転系切り
47	G5 I層	第53回 PL. 17	須恵器 片底部	底径(6.5)	底部1/8	内外面：回転ヨコナデ 底内面：ナデ	灰色	底部回転系切り
48	G4 I層	第53回 PL. 17	須恵器 片	口径(20.3)	口径1/4	外表面：ナデ 内面：ナデ、頸部以下 ヘラケズリ	にぶい黄褐色	
49	D5 I層	第53回 PL. 18	土師器 邊口縁	口径(22.2)	口径1/9	外表面：回転ヨコナデ 内面：回転ヨコナデ、頸部以下 ヘラケズリ	にぶい黄褐色	
50	F4 I層	第53回 PL. 18	土師器 邊口縁	口径(22.3)	口径1/4	外表面：ナデ 内面：ナデ、頸部以下 ヘラケズリ	にぶい赤褐色	
51	F4 I層	第53回 PL. 18	土師器 邊口縁	口径(23.0)	口径1/6	外表面：ナデ 内面：ナデ、頸部以下 ヘラケズリ	橙色	
52	G5-F5 I層	第53回 PL. 18	土師器 邊口縁	口径(24.2)	口径1/10	内外面：回転ヨコナデ	にぶい黄褐色	内外面煤付着
53	F4 I層	第53回 PL. 18	土師器 邊口縁	口径(27.4)	口径1/12	外表面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ、頸部以下ヘラ ケズリ	にぶい黄褐色 黑褐色	
54	H4 I層	第53回 PL. 18	瓦質土器 羽垂口縁	口径(21.9)	口径1/8	口径：内外面ナデ 底座：内外面粗いナデ	灰黃褐色	
55	H4 I層	第53回 PL. 18	土師器土器 鶴口縁	口径(25.6)	口径1/16	内外面：ナデ、板ナデ	褐色	外表面煤付着
56	C5 I層	第53回 PL. 20	土師器 鶴口縁	口径(36.3)	口径1/16	内外面：ナデ	にぶい黄褐色	外表面煤付着
57	G4 I層	第53回 PL. 18	土師器 鶴口縁	口径(28.9)	口径1/12	外表面：ヨコナデ 内面：ヨコナ デ、頸部以下ヘラケズリ	にぶい褐色	
58	F4 I層	第53回 PL. 18	土師器 鶴口縁	口径(35.4)	口径1/20	外表面：ヨコナデ 内面：ヨコナ デ、頸部以下ヘラケズリ	にぶい褐色	
59	H5 I層	第53回 PL. 18	土師器 鶴口縁	口径(35.3)	口径1/8	外表面：ミガキ 内面：口縁ミガキ、頸部ナデ	にぶい黄褐色	
60	H4 I層	第54回 PL. 18	須恵器 (土師質)	口径(13.4)	口径1/8	内外面：回転ヨコナデ	灰白色	
61	H5 I層	第54回 PL. 18	土師質上器 片	口径(14.2)	口径1/6	内外面：回転ヨコナデ	褐色	
62	G3 I層	第54回 PL. 17	土師質上器 片底部	底径(8.0)	底部1/4	外表面：回転ヨコナデ 内面：ナデ	暗灰褐色	底部回転系切り
63	H4 I層	第54回 PL. 17	土師質上器 片底部	底径(7.8)	底部1/8	内外面：ナデ	浅黃褐色	底面へラ切り→ナデ 内外面赤形
64	F5 I層	第54回 PL. 17	須恵器 (土師質) 高台底部	底径(12.0)	底部1/4	内外面：回転ヨコナデ	灰白色	底部へラ切り 内外面赤形
65	H4 I層	第54回 PL. 17	土師質上器 片	口径(11.6) 高さ 2.0 底径(6.3)	口径1/5	内外面：回転ヨコナデ	浅黃褐色	高部へラ切り 内外面赤形

No.	遺構・地区 部位	押岡 PL.	器種	法量 (ml)	残存率	調整	色調	備考
66	F4 Ⅰ層	第54回 PL. 18	土師質土器 皿	口径(14.8) 器高 2.85 底径(10.3)	底部1/16	外面：回転ヨコナデ 内面：ナデ	浅黃褐色	底部へラ切り 内外面漆彩
67	G3 Ⅰ層	第54回 PL. 20	土師質土器 皿	口径(14.8) 器高 1.4 底径(5.6)	底部1/3	内外面：回転ヨコナデ	灰白色	底部回転糸切り
68	H4 上層	第54回 PL. 18	土師質土器 皿	口径(9.2) 器高 1.7 底径(6.4)	底部1/4	内外面：回転ヨコナデ	明黃褐色	底部回転糸切り
69	D5 Ⅰ層	第54回 PL. 18	土師質土器 皿	口径(9.2) 器高 1.7 底径(6.4)	底部1/5	内外面：回転ヨコナデ	明黃褐色	底部回転糸切り→ナデ
70	H4 Ⅰ層	第54回 PL. 18	土師質土器 皿底部	底径(4.2)	底部3/4	内外面：ナデ	浅黃褐色	底部回転糸切り
71	H4 Ⅰ層	第54回 PL. 16	土鉢	長さ 5.3 最大幅 2.7 孔径 0.7 重量 30.4g	完形	ナデ	明黃褐色	
72	G5-H5 サブトレ Ⅱ層	第55回 PL. 20	須恵器 縦口盤	口径(18.6)	口縁1/8	内外面：ヨコナデ	暗緑灰色 銀灰色	内面に自然釉付着
73	H4 Ⅱ層	第55回 PL. 20	須恵器 環	口径(14.0)	口縁1/8		灰色	
74	G3 Ⅱ層	第55回	土師器 壺	口径 12.4 器高 4.3 底径 3.6	口縁1/2 底部先存	内外面：ナデ 底部内面オサエ	淡黄褐色 黒褐色	内外面漆付着
75	G3 Ⅱ層	第55回	土師器 壺	口径 15.4 器高 5.55 底径 4.2	ほぼ完形	外面：ナデ→ハケ 内面：ナデ	浅黃褐色	外面漆付着
76	G3 Ⅱ層	第55回 PL. 20	土師器 壺	口径(15.6) 器高 4.45 底径 5.0	口縁1/8	外面：ハケ 内面：ナデ	浅黃褐色	外面漆付着
77	F4 Ⅱ層	第55回 PL. 16	土師質土器 杯	口径 11.6 器高 4.0 底径 2.8	ほぼ完形	内外面：回転ヨコナデ	橙色	底部回転へラ切り→耐ナ デ
78	Ⅱ層	第55回 PL. 20	土師質土器 片	底径(5.4)	底部1/2	内外面：回転ヨコナデ	明黃褐色	底部回転へラ切り→耐ナ デ
79	C5 Ⅱ層	第55回 PL. 20	青磁 縦口盤	口径(13.4)	口縁1/8	内外面脚部（貯入）	灰色	
80	C6-C7 Ⅱ層	第55回 PL. 20	青磁 壺	—	—	内外面釉面、外面に輪連弁文	灰色	龜泉窯系
81	E4 Ⅱ層	第55回 PL. 20	土師器 壺口盤	口径(24.0)	口縁1/6	外面：ナデ 内面：ナデ、頸部以 下ヘラガリ	明褐色	
82	F5 Ⅱ層	第55回 PL. 18	須恵器 壺側部	—	—	外面：平行可見 内面：門心円文當て具痕	灰色	
83	搅乱土	第56回 PL. 20	須恵器 壺口盤	口径(11.2)	口縁1/4	内外面：回転ヨコナデ	灰オーラー色	
84	搅乱土	第56回 PL. 17	須恵器 壺口盤	口径(12.4)	口縁1/10	内外面：回転ヨコナデ	灰色	
85	T5 搅乱土	第56回 PL. 20	須恵器 壺口盤	口径(13.4)	口縁1/6	内外面：回転ヨコナデ	灰色	
86	搅乱土	第56回 PL. 20	須恵器 壺口盤	口径(14.8)	口縁1/12	内外面：回転ヨコナデ	灰色	
87	G4 搅乱土	第56回 PL. 17	須恵器 壺口盤	—	底部1/2	内外面：ナデ	灰色	底部へラ切り→回転ヨコ ナデ
88	SD1 搅乱土	第56回 PL. 20	須恵器 壺口盤底部	—	底部先存	外面：回転ヨコナデ 内面：ナデ	灰色	底部へラ切り→回転ヨコ ナデ
89	搅乱土	第56回 PL. 20	須恵器 壺蓋	口径(12.0)	口縁1/6	内外面：回転ヨコナデ	黃褐色	外面自然釉付着
90	G4 搅乱土	第56回 PL. 17	須恵器 壺蓋	—	つまり1/8	外面：回転ヨコナデ 内面：ナデ	灰色	
91	輪筒色上 直上	第56回 PL. 20	須恵器 壺蓋	—	つまり1/8	内外面：回転ヨコナデ	灰	
92	C6-C7 輪筒色上	第56回 PL. 20	須恵器 壺蓋	口径(9.8)	底部1/4	内外面：回転ヨコナデ	灰色	
93	輪筒色上 輪筒色上	第56回 PL. 20	西台灰底盤	底径(8.8)	底部1/5	内外面：回転ヨコナデ	灰色	底盤回転糸切り
94	搅乱土	第56回 PL. 20	須恵器 壺口盤底	底径(12.4)	底部1/5	内外面：回転ヨコナデ	灰褐色	
95	搅乱土	第56回 PL. 20	須恵器 壺口盤	—	—	外面：平行可見 内面：輪連状当て具痕	暗灰色	
96	搅乱土	第56回 PL. 20	須恵器 壺口盤	—	—	外面：平行可見 内面：輪連状当て具痕	灰色	
97	G6 搅乱土	第56回 PL. 17	須恵器 壺底部	底径(7.1)	底部1/8	内外面：ナデ	灰色	底部回転糸切り→ナデ
98	SD1 搅乱土	第56回 PL. 20	須恵器 壺底部	底径(10.1)	底部1/4	内外面：ナデ	灰色	底部回転糸切り

No.	遺構・地区 部位	探査 PL	器種	法量 (cm)	残存率	調査	色調	備考
100	SD4 複乱土	第56回 PL. 19	須恵器 高环罐	底径(9.5)	底部1/4	内外面：回転ヨコナデ	灰色	
101	調査区内 複乱土	第56回 PL. 20	須恵器 环芯部	底径(9.6)	底部1/8	外面：回転ヨコナデ→下部に弱い 板ナデ、底面ナデ 内部：回転ヨコナデ	灰褐色	
102	H4 複乱土	第57回 PL. 18	瓦質土器 口沿口縁	口径(29.0)	口径1/12	外面：口唇部回転ヨコナデ、頸部 ナデ→指オサエ 内部：斜位ナデ→口唇部回転ヨコ ナデ	灰白色	
103	SD1 複乱土	第57回 PL. 20	土師器 要口縁	口径(24.0)	口径1/10	外面：ナデ 内面：口縁ナデ、頸 部ケズリ→ナデ	にぶい黄褐色	
104	調査区内 複乱土	第57回 PL. 20	土師器 要口縁	口径(20.9)	口径1/16	外面：回転ヨコナデ 内部：口縁回転ヨコナデ、頸部ケ ズリ	灰黄褐色	外因付着
105	調査区 南側 複乱土	第56回 PL. 20	土師質土器 馬蹄形底部	底径(7.4)	底部1/4	内外面：回転ヨコナデ	淡黄褐色	内外面赤彩
106	H4 複乱土	第56回 PL. 17	須恵器 (土師質) 高台付底部	底径(7.3)	底部1/3	摩滅著しく調査困難	灰白色	
107	調査区内 複乱土	第57回 PL. 20	土師質土器 片	口径(11.3)	底部1/5	外面：ナデ	淡橙黄色	底部へラ切り→口ナデ 内外面赤彩
108	G5 複乱土	第57回 PL. 18	土師質土器 片底部	底径(6.4)	底部2/3	内外面：回転ヨコナデ	淡黄褐色	底部回転系切り
109	調査区 南側 複乱土	第57回 PL. 20	土師質土器 片底部	底径(8.8)	底部1/3	外面：回転ヨコナデ	暗赤褐色	底部へラ切り 内外面赤彩
110	D6 複乱土	第57回 PL. 20	瓦質土器 頭口縁	口径(25.8)	口径1/12	外面：ナデ	暗黄褐色	外面に黒斑あり 内外鉄錆付着
111	調査区内 複乱土	第57回 PL. 20	瓦質土器 頭口縁	口径(26.2)	口径1/16	外面：ナデ	灰褐色	内外面に黒斑あり
112	調査区 北側 複乱土	第57回 PL. 20	瓦質土器 頭口縁	口径(30.2)	口径1/8	外面：ナデ	黄褐色	内外面に黒斑あり 口唇上面に沈線
113	調査区 南側 複乱土	第57回 PL. 20	瓦質土器 頭口縁	口径(33.4)	底部1/8	外面：ナデ 内部：ナデ	淡赤褐色	
114	E5 複乱土	第57回 PL. 20	弥生土器 茎脚部	—	底部1/10	外面：ナデ	褐色	表面に刻みを施す 発生時期
115	G3 複乱土	第57回 PL. 17	土師質土器 壇口縁	口径(13.0)	口径1/6	外面：回転ヨコナデ	棕色	
116	SD1 複乱土	第57回 PL. 16	土器	長さ 4.9 最大幅 1.2 孔径 0.3 重量 7.2g	ほぼ完形	ナデ	明赤褐色	
117	SD1 複乱土	第57回 PL. 16	土器	長さ 4.5 最大幅 0.9 孔径 0.3 重量 3.8g	ほぼ完形	ナデ	明赤褐色	

石器・石製品

No.	遺構・地区 部位	探査 PL	種類	特徴	長軸 (cm)	短軸 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材
S1	SD1 複乱土	第46回 PL. 19	石棒か 石棒	両端部欠損	長さ17.1	径約4.7	550	謝賞片岩	
S2	SD1 複乱土	第46回 PL. 19	凹石	両面中央に凹み	12.3	10.3	6.3	1190	安山岩
S3	G4 1層	第46回 PL. 19	打製石斧	刃部欠損	8.2	7.5	1.9	180	安山岩
S4	調査区内 1層	第57回 PL. 19	郴石	表面、側面に磨り痕 背面に加工痕	7.3	4.4	1.3	70	頁岩
S5	D6 崩灰褐色土	第57回 PL. 19	打製石斧	刃部欠損	8.8	7.5	2.4	260	安山岩
S6	H4 複乱土	第57回 PL. 19	敲石	側面に敲打痕 全体に被熱痕	8.3	7.1	5.7	480	安山岩
S7	調査区内 1層	第57回 PL. 19	砾石	三面に磨り痕	14.5	4.9	1.9	170	謝賞石